
エピローグ

イチハヤ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

エピソード

【Nコード】

N7237W

【作者名】

イチハヤ

【あらすじ】

勇者として異世界召還された女子高生がなんとか元の世界に帰る
うとする話。

prologue

グオオオオオオッ

！！

その日、世界中に魔竜王グリストフェレスの咆哮が響き渡った。

「ああ、やっと」

そして世界中を震わせたその最期の叫びを、一番間近で耳にした少女の胸に走るのは、歓喜。

ようやく、だった。

一年 それは何十年にも渡り、この魔竜が率いる軍勢に苦しめられた民衆にとっては、驚異的な速さだったろう。

だが、少女にとってはこの一年こそが長く、苦しい道のりだった。

これまで、どれほどの血を浴びただろう。

どれほどの人の死を見てきただろう。

どれほどの涙を、流したろう。

どれほど いや、やめよう。

過去を振り返る必要は無い。もう、終わったのだ。魔竜は倒した。王を喪い散れ散れになった魔物は最早烏合の衆。

もう、勇者の 私の力は必要ない。

世界を脅かすものはなくした。だから、もう、私は

「やっと、帰れる」

視界が不意に暗くなる。

遠くで名を呼ばれた気がした。だが、少女は、早坂理央はやさかりあつはその声に
答えることなく、意識を手放した。

この一年を、夢で終わらせるために。

「すみません、ムリです」
「は」

思いも寄らぬ答えを聞き、理央はぼかんと口を開けた。
今、コイツはこの、自称神はなんと言った？

数秒間があいてから、理央は眉間に皺を寄せこの一年で随分と迫力を増した睨みを効かせて目の前の白く丸い発光物体に問い直す。

「ごめん、もう一回言ってくれろ？」

自称でも神に対して随分砕けた物言いかもしれない。だが、理央は目の前の発光物体をどうしても敬う気にはなれなかった。まあ理央が今いるこの真つ暗な空間には自分と彼(?)しかいないので咎められる心配もないから構わないだろう。

自称神がぴこぴここと忙しく点滅を繰り返す。どうやら焦っているらしい。

「あの、だからですね。貴女を元の世界へと還すことは　　ひっ！
すみませんすみません！」
「謝らなくていいから、ちゃんと説明して！」
「はいっ！」

理央の周りを発光しながらつろちよると飛び回るのが鬱陶しくて怒鳴ると、自称神は怯えたように身を伸び縮みさせ、泣きそうな声で返事をした。相変わらず神の癖に情けなく、その姿はどこか小動物

めいている。

「…………約束、したわよね」

冷静に、冷静に　　そう自分に言い聞かせても、口から出たのはいつもより幾分か低い声だった。案の定、萎縮した声が返ってくる。

「はい…ですがそのう…………あの時とは事情が変わりまして…………」
「事情つて？」

「貴女は、召還された勇者として一年を私の世界で暮らし、そして魔竜を見事討伐してくれました」

自称神の言葉に、理央はうんうんと頷く。

元々理央は、魔竜に虐げられていたあの世界の住人ではない。現代日本にいる、ごくごく普通の女子高生だ。

当然、こちらに来るまで剣を持ったことも魔法を使ったこともない。そんな彼女が何故異世界で勇者なんて職業をやっていたかと言えば、十中八九今目の前にいる物体のせいだろう。

彼はある日突然理央の夢の中に現れて、こう宣ったのだ。「勇者になつて、私の世界を救ってください」と

その時は所詮夢と取り合つてなかったのだが、翌日目を覚ませばそこは異世界で、気付けば勇者として祭り上げられて今日にまで至る。

理央が言った約束、とはその後にも色々あつて、自称神と交わしたもののことだ。

『魔竜を倒したら、元の世界に帰してもらおう』

この約束のために、理央は今日まで余所見することなく頑張ってきたのだ。

魔竜を倒したのは、自称神に与えられた加護という名のチート能力によるものが大きい。理央自身も決して膝を折ることをしなかったこそ、ここまで来れたのだと思っている。なのに

「どうして」

ようやく帰る条件を満たしたはずの理央に自称神が突きつけたのは、「無理」という二文字。

理央の心の中では、「どうして」「何故」が吹き荒れていた。

「……貴女は、私の世界に影響を与えすぎたのです」

「影響？」

「ええ。主に、貴女を好ましいと想う人　つまり、貴女を失いたくないと願う人が私の世界に多くいて、もし、貴女が元いた世界に還ってしまえば、彼らの悲しみが世界を歪めるでしょう」

「なに、それ……私のせいってこと？」

話の意味を理央なりに汲み取って吐き捨てると、自称神は悲しそうな声で「いいえ」と答えた。

「責は考えが甘かった私にあります。貴女は、世界を救った救世主。その貴女を、私の子らが慕わないわけがないのに……」

やるせなさを含む声。彼も約束を違えることを本当に申し訳なく思っているのが窺えた。

「ねえ、世界が歪むって具体的にどうなるの？」
「世界に悲しみが満ちます。人々だけではなく、動物や精霊、世界に生きるすべての生命が悲哀に沈み、不幸を呼び、それは終わることなく やがて、他の世界にまで影響を及ぼすでしょう。
……もしかしたら、貴女が生まれた世界をも、巻き込むかもしれない
せん」
「なっ……」

絶句する。

どこかで自分には関係ないと思っていた。自分が帰ったあとこの世界がどうなるかと知ったこっちゃんいとすら。

自称神は、理央のそんな考えを見透かしていたのだろうか。

「とにかく、私も解決策を考えますので、貴女はもうしばらくこちらで過ごしてください」

「そんな……」

ようやく終わったと思ったのに。

どうやら、夢はまだ終わらないらしい。

「　　さま、リオウさま」

今にも泣き出しそうな声が理央の名を呼ぶ。

この声は　　セイのものだ。

重い瞼を持ち上げると、眼帯をしていない方の瞳に涙を一杯に溜めた、隻眼の少年が理央をのぞき込んでいた。

「セイ……」

少年の名を理央が呼ぶと、彼はくしゃりと顔を歪めた。ぼたり、頬に彼の涙が降った。

「よかった……っ、もう、目を覚まさないのかと思い、ました……」

そう言って力の限りに理央を抱きしめるセイの肩越しに、炎のように赤い空を見て、理央はまだ自分が魔竜王との決戦の地であった力ーリーステルシャに居ることを知る。

(そっだ……まだ、こっちにいることになったんだ)

自称神との会話を思い出す。

……ようやく、帰れると思ったのに。

「……………」

「リオウ様？　つまさか、どこかお怪我を?!」

「いや、大丈夫。……心配かけたね」

黙り込んだのを勘違いしたセイが顔色を変えるのを宥めて、理央は起き上がった。ついでに体に不調がないか確認しておく。うん、大丈夫みたいだ。

「セイは、怪我してない？」

「あ、はい…僕は後ろにいただけですから」

しゅんとした様子のセイの頭をくしゃりと撫でる。

「ここまで来ただけでも十分凄いことだよ」

なにせ理央がいたのはこの戦争の最前線だ。軍人でもない彼がここにいること自体、奇跡みたいなものだろう。

頭を撫でられたセイは、嬉しそうに隻眼を細める。

「……………」

理央は、そんなセイを見て目を伏せた。

『理央を失いたくないと願う人物』自称神にその話を聞いた時、真っ先に浮かんだのはセイと、彼の双子の弟レイの顔だった。

彼らは、元奴隷だ。

ある貴族に飼われ、虐げられていたところを理央が助けたことがきっかけで、以来彼らは理央につき従っている。

彼らにとって理央は、魔竜を倒す前から救世主だったのだろう。

向けられる純粹な敬慕の念が、今は痛かった。

「とりあえず、軍の人達と合流しなきゃね」

理央は翳りを見せた思考を振り払うようにそう言った。
ボスを倒してもここが敵陣ということに変わりはない。自称神が解
決策とやらを探してくるのを待つにしても、それまで安全を確保で
きる場所にいた方がいいだろう。

「……………やっと、終わったんですね」

セイが呟く。奴隷時代は屋敷から出ることは許されなかった彼にと
って、ここまでの道のりは厳しいものだっただろう。

「うん……………終わったね」

そう、魔竜は倒した。

理央は空を振り仰ぐ。カーリーステルシャの空はいつでも燃えるよ
うに赤く、地面は乾いた赤茶で、ひび割れが目立つ。草木の生えぬ
不毛の地。

人々はそう言ってこの地を忌避するが、理央にはそれがとても美し
く見えた。

そういえば、こちらに来る前にこんな風景をテレビで見た気が
する。世界遺産とかの紹介をする番組で、夕日に照らされた時の風
景などそっくりだった。

だからだろうか。何故か、美しいのと同時に懐かしくも想うのだ。

「帰ったら海外旅行でもしようかな……………」

英語のテストの度に「海外など一生行かない」などと言っていた頃
が遠い昔のようだ。

でも、異世界で勇者やることに比べたら、それぐらい軽いものだと今では思う。

「…行こうか、セイ」

「はい」

神に再び呼び出されるまで、しばらくはこんな風に故郷のことを思い出しながら、帰ったら何がしたいかのんびり考えるのもいいだろう。

もう、理央がやるべきことはないのだから。

魔竜を討伐した勇者が本陣へと戻ってくると、本陣の兵士達は皆歓声をあげて彼女を迎えた。

だが……

「凱旋……ですか」

眉根を寄せた勇者殿を見て、連合軍の参謀長であるウィルドは不思議そうに首を傾げた。

「ええ。魔竜が討伐された知らせは既に王都へと走らせましたから。今頃、皆勇者殿の帰還を今か今かと心待ちにしていることでしょう」

「はあ……」

どうにも気乗りしない様子だ。普通なら今頃、故郷へ帰れることや、褒美のことなんかで頭がいっぱいだろうに。

（あ、いや）

そういえば、彼女は異世界から召喚されたのだから、故郷はこの世界のどこにもない。

これから凱旋する、彼女を召喚したわが国ハイグレードも、彼女は1ヶ月やそこら滞在した程度なので里心など芽生えるわけがない。この年頃の少女にしては珍しくどこか冷めた性格の勇者殿は、眉根を寄せたまま口を開く。

「あの、それって行かなきゃダメですか」

「は？ まあパレードはなしにしても、とにかく一度王族の方や民の前に姿を現していただかないと」

「……そう、ですか」

勇者殿の黒い瞳が、諦めの色を帯びる。

その顔には、はっきりと「面倒くさい」と書いてあった。

魔竜討伐を成し遂げて帰ってきた勇者殿は、肩の力が抜けたように見えたがどうやらいらなところの力まで抜けてしまったように見える。

要するに無気力。

本陣に戻ってすぐの時も、兵士達の歓声に特に反応を返すことなくただ戸惑ったように眉根を寄せていた。

まあ、偉業を成し遂げたすぐ後だから仕方ないのかもしれない。ウィルドはそう結論付けた。

元々まだ若いのに鍛錬を積んだベテランの軍人のような雰囲気のある彼女だ。少女らしい反応を求めるところからして間違っている。

「分かりました。乗り物や食事などはそちらが用意してくださいませんか？」

「あ、はい、それは勿論。」

あの、兵も何人かつけたいのですが……」

「……なるべく少なく、お願いします」

「了承しました」

ため息混じりの声に、ウィルドは胸に拳をあて答えた。

彼女が来てからの一年、それまで魔竜の軍勢の侵略に怯えるばかりだった戦況は一変した。

圧倒的な力。そして、強い　強すぎる意志。

迷いなく敵に向かっていく姿に、まるで鬼神のようだと、さすが勇者だと人々は賞賛を口にのぼらせた。

だが、彼女の今日までの軌跡をそれなりに近くで見してきたウィルドは、彼女に違う感想を抱いた。

まるで、死に急いでいるようだと。

勿論、死を恐れているには魔竜に1人で立ち向かうことなど出来ないだろう。

その姿勢が兵士達を奮い立たせ、勝利へ導いたと言ってもいい。

しかし　ウィルドは、先ほどまでの勇者殿の様子を思い出す。

笑みをちらとも浮かべない顔。感情の起伏が少ない声。少女らしい、華奢な肩。

彼女と会話を交わす度、ウィルドの心に違和感がじわりと染み出てくる。

何かを間違えているような、そんな気がした。

そうか、ハイグレードに戻らねばならないのか。
理央は不思議な気持ちだった。

元々魔竜を倒したらずぐに元いた世界に帰してもらうつもりだったため、こちら側に未練など何もなかった。

そのため参謀長に「凱旋」と言われても「多くの人々が貴女の帰りを待っている」と言われても、理央の耳には他人事のように響いたのだ。

「どうしよう……」

誰もいなくなった天幕の中で1人呟く。

ぶっっちゃけ逃げたい。

王都に行くのはまだ構わない。だが 王城に行くのはどうしても避けたかった。あと神殿も嫌だ。

理央はああいった貴族や王族といった人間が集まる場所を苦手としていた。

全員が全員そうというわけではないが、ああいう偉い人というのは、どうも他者を見下しているところがある。

まあ実際偉いんだろうけど。しかし人類平等を唱う世界で育った理央は伯爵だの侯爵だの言われてもいまだに違いがよく分かってない。

「ようリオウ！生きてるかー」

なんとか逃げる方法はないかと半ば現実逃避のように頭の中で策を

巡らせていると、天幕の扉代わりの布がばっさあ！と勢いよく開く。同時に飛んでくる大きな声。顔を見なくても理央にはそれが誰か分かった。

「將軍……」

小柄でひよろつとした参謀長のあとに見ると、余計に大きく見える山のような体躯。また髭剃りを怠っているのか熊によく似た顔は、毛むくじやらで、更に熊へと近付いていた。

ハイグレード国の將軍、ロドル・ゴーラント。それが彼の名だ。

その容姿から親しみだったり蔑みだったりを込められて『熊將軍』とか『動く山』とか呼ばれる彼は、何故か小脇にセイを抱えていた。

「久しぶりだなありオウ！どこも怪我してないか！飯くつたか！酒呑もうぜ！」

「……怪我はしてないしご飯は食べた。あと、酒は呑まない」

相変わらず豪快で空気を読まない人間だ。理央はため息を吐く。

正直彼のテンションは苦手だが、色々と世話になったこともあるので無碍にはできない。

「で、なんでセイを抱えてるの」

「ん？ ああ、なんかそこでウロウロしてたから連れてきた」

セイも彼には恩があるため強く出れないのだろう。大人しく抱えられていたセイのことを突っ込むと、將軍は今気が付いたと言わんばかりにセイを地面に下ろした。「すみません。入っていいものかどうか分からなかったもので……」

別に悪いことなど何ひとつしていないのに謝るセイを見て、理央は、この子は將軍の馴れ馴れしさというか図々しさを少し分けてもらったほうがいいのではないかと一瞬本気で考えた。

4 (後書き)

国や人の名前は割と適当に決めています。

「それで、何か用？」

「おおそつだ。お前、一足先に帰るんだって？」

「ああ、凱旋のこと」

将軍が頷く。

ラスボスを倒したからといって、全軍が一斉に帰るわけにもいない。

戦争の後始末や、他国との話し合い、身動きの取れないほどの重傷者もいるため、参謀長の話では何隊かに分けて移動させるといふことだ。

そして、その先頭に立つことになったのが勇者　つまり理央だった。

勝利の興奮が人々から抜けられない内に、英雄を衆目に触れさせることで色々と利益に繋げようという魂胆らしい。理央のいた世界でも、大きな大会で功績を残したり、賞を受賞した人をやたらと祭り上げる光景はよくあることだったので、多分自分もそうだった扱いなのだろう。

まあ、理解できなくもない。

祭り上げられる方としてはあまりいい気分ではないが。

「いいなー。俺はまだ帰れねーんだよ」

「そうなの？」

「ああ、お前のあとだと。人数が多いから、時間もかかるだろうなあ」

こんなので祖国では、軍人の代表として下々の者から人気が高い

將軍なのだ、彼は。恐らく一番人数の多い隊を任されたのだろう。理央とはまた違った形だが、どちらも花形として扱われていることに変わりない。

一応軍人にとつては名誉あることなのだろうが、いいなあいいなあと子供のように繰り返す將軍には不満なようだ。

「俺も早くティナに会いてえなあ」

「ああ……」

どうやら不満はそこにあるらしい。

ゴラント將軍は、国中に知れ渡るほどの愛妻家だ。理央も彼の奥さんと何度か面識があるが、夫婦で並ぶと正に美女と野獣。金髪碧眼の女神のような美貌を持つ女性だった。

聞くところによれば、彼女が將軍に嫁ぐ際に何人もの男性が嘆き、將軍に刺客を送り込んだり自ら決闘を挑んだりして全て返り討ちに遭うなんてことがあったようだ。

ああ、なんとなく將軍が訪ねてきた訳がわかってきたかも。

「……ついでで良ければ、伝言でも承るけど」

「本当か?!」

理央がぼつりと提案すると、將軍が顔を輝かせる。

どうやらこれが狙いだったようだ。彼は図々しくせに時々何故か回りに構わないけれど。

別に構わないけれど。

あらかじめ手紙でも書いてきたのだろうか、いそいそと懐を探りだす將軍を横目に理央はじつと沈黙を守るセイを見る。

「途中で立ち寄れるかどうか分からないから、もしかしたらセイに

頼むことになるかもだけど、いい？」

「ああ、勿論！」

王族とか貴族の面々にはしきたりや暗黙の了解が山ほどある。

王族を差し置いて將軍の家に立ち寄ることは失礼に当たるかもしれないし、身分が心許ないセイを王城に連れて行くことは躊躇われる。

ならば理央が城にいる間、セイには將軍の屋敷に身を寄せてもらえばいいだろう。將軍の奥方は、見た目こそ繊細なガラス細工のような女性だが、中身は將軍に負けず劣らず豪快だ。それに

「レイと会うのも久しぶりだろうし、いい機会だからゆっくり休みなさい」

將軍の屋敷には、既にセイの双子の弟、レイが世話になっている。

將軍の家族を安心させることもでき、久々の双子の再会も果たせるこの提案は、とてもいい案に思えた。

「……はい」

賛同したセイの表情は、あまり晴れやかとは言いがたかったけれど。

「報告します！」

勇者様の活躍により、魔竜討伐、成功しました！」

謁見の間に飛び込んできた兵の言葉に、その場にいた一同は数拍の間静まり返った。

「それは、真か……？」

玉座に座るのも一苦労といった感じの老王が、玉座から腰を浮かし嘔れた声を出す。

陛下が立った！

長く続くハイグレード王家でも最長の在位期間の記録を今なお更新中の王は、近頃では誰かの助けを借りねば1人で立つこともままならぬ状態にあった。だが、今王はふるふると震えながらも立ち上がっている。

そのことにその場にいた者は感動を覚える。そして、文字通り陛下を奮い立たせた知らせの存在を思い出した。

一瞬王へと向いた意識が自分に戻ったのを感じたのか、報せを持ってきた兵は敬礼の形を取る。

「はっ！ 我らが連合軍の勝利です！」

「……そうか。よくぞ……」

高らかな勝利の宣言に、目頭を押さえる王。周囲ももたらされた福

音に一斉に沸き立つ。

勇者や連合軍への賛辞を口にする者、王と同じように目頭を押さえ
る者、放心する者 人々が様々な反応を示す中、彼は、拳を
強く握りしめた。

宝石のような煌めきを閉じ込めた蒼い瞳を細め、彼はまるでこれか
ら戦地に赴くような顔で低く、彼女の名を呼んだ。

「リオウ……」

やり遂げたのか。

形の良い唇から放たれた名は、誰にも聞き咎められることなく空
気に溶けていった。

7 (前書き)

R 1 5 ?

くすくす、くすくす

嘲りを秘めた密やかな笑い声が、回廊に、理央の鼓膜に、響く。

「も大変ですわね。あんな野蛮な娘を相手にしなければなら
ないなんて」

甘ったるい声。理央の耳に障るそれは、きっと彼にとっては心地良
いのだろう。

くつくつと低く笑いながら、彼の声が応える。

理央の知らない、冷酷で、その癖とろけるような熱情を孕んだ声だ
った。

「これも仕事だからな。まあ、存外御し易くて助かった」

「ええ　　本当に、馬鹿な娘」

くすくす、くすくす。密やかにさざめくような笑声は、やがて女の
嬌声に変わっていく。男女の荒い息遣いに、理央の脳がぐらぐら揺
らぐ。

「
」

彼が女の名を呼んだ。知っている名だった。いつも、勝ち誇ったよ
うな、嘲るような視線と笑みを理央に向けていた女性。

ああ、そういうこと。

頭がぐらぐらする。もう何も聞きたくない。なのに、彼女は勝利を宣言するかのように、高らかに叫ぶ。

「ああ 殿下あっ」

もう、なにも聞きたくなかった。

「……………」

目が覚める。寝間着のシャツが、汗でびっしょりと濡れていた。

「気持ち、悪い……」

荒く息を吐きながら、理央は仰向けから俯せの姿勢をとった。胃から吐き気がこみ上げてきたが、特にもどすことなく、唾液が口端を零れただけだった。

（落ち着け……）

しばらく呼吸を安定させることだけに集中する。ここは港町、ハイグレード港の宿屋だ。王都ハイグレードからは目と鼻の先であり、明日の昼には王都に入るために今日はここで休むことになった。

(ああ　　そうだ、明日)

明日、王都に入り、王に謁見するのだ。
だからかもしれない。あんな夢を見たのは。

僅かに落ち着きを取り戻した理央は、寝台脇に置いてあった水差しをとり、コップに水を注いでそれを一気に飲み干した。
ぐいっ、と口の周りを服の袖で拭う。

「はっ……」

漸く人心地つけた気がした。

ついでに汗で張り付くシャツも脱ぎ捨てる。誰の配慮か、宿屋に部屋をとってもらったのは理央だけで、理央とこの部屋の見張り以外は、広間で野営をすることになっているため部屋には理央1人だった。

よかった、と思う。

これが野営した時であったなら、取り乱した状態を誰かに見られたかもしれない。

こんな姿を、誰にも　　特に理央を勇者と崇める人達には見られなくなかった。

「私は、勇者」

寝台の上でうすぐまりながら、自分に言い聞かせる。

理央は、早坂理央は魔竜を倒すために呼ばれた『勇者』。
この世界の人々が望むのは、世界を救ってくれる勇者だ。間違っても早坂理央という女子高生ではない。

理央の、くだらない小娘の姿など、誰にも見せてはいけない。
誰も、そんなものを必要としないのだから。

8 (前書き)

不快な表現があります。ご注意ください。

それは、理央がハイグレード国に召喚されてまだ間もない頃。その頃の理央は王城に滞在しており、右も左も分からず心細かった自分に、なにくれと声をかけてくれたのが彼だった。

ヴェリオス・リア・ハイグレード。

ハイグレード国の王子殿下だ。

濃厚な蜂蜜のような輝きを放つ金髪と、宝石のような煌めきを閉じ込めた蒼い瞳をもつ彼は、物語の中の王子様そのものだった。

甘いマスクで微笑みかけられ、優しい言葉を囁かれ 異性に免疫などない理央は、気付けば彼に恋心を抱いていた。

今となつては、それは憧れが大半を占める恋だったと思う。

けれど当時の理央はこれが恋なのだと思ひ込み、彼の言動に一喜一憂していた。

彼のために、世界を救おうとすら思いはじめていた。

彼と国の思惑になど気付かずに。

「も大変ですわね。あんな野蛮な娘を相手にしなければならぬなんて」

その日も、ヴェリオスの姿を探して未だになれない場内をさまよっていた。

聞こえてきたあまり耳障りがよいとは思えない声に、理央は反射的に身を隠した。

「これも仕事だからな。まあ、存外御し易くて助かった」

続いて聞こえてきた声に、盗み聞きはいけないと踵を返そうとした足が止まる。

彼の、ヴェリオスの声だった。

いつも甘いばかりの声はどこか冷酷な響きをもって回廊に木霊する。野蛮な娘　城内の、特に貴族達がそう評する人物を、理央は知っていた。

「ええ　本当に、馬鹿な娘」

わたしのこと、だ。

やがてはじまった情事が奏でる音から逃れるように、理央は自室に戻ってベッドに潜り込んだ。

その時はまだ、王子と彼女がなんの話をしてたのか正確に理解していなかった。

だが、王子にはかり向けていた目を他にも向ければ、その内容はすぐに知れた。

昔から世界が窮地に陥ると、この国は異世界から勇者を召喚した。しかし、彼らの中にはやる気もなく、ただただ故郷に返せと嘆くばかりの者もいたらしい。

当たり前だ。彼らにとって此処は異世界である上、突然勇者なんて重荷を他人に押し付けるような人達を救おうだなんて余程のお人好しでないとい引き受けないだろう。

しかし勇者に代わりはないため、国の方もいそいそですかと還すわけにはいかない。そして彼らは、ある方法を思いついた。

勇者に見目麗しい異性をあてがい、籠絡させる。

あてがわれた異性を勇者が愛せば勇者にはこの世界を護る理由ができる。

『人』で縛り付けること。

それがこの国の人々が考えた世界を救う方法だった。

そして、その様式は当然のように今代まで踏襲され、ヴェリオスにその役がまわってきた。そういうことだった。

知ってしまったえば理央は、城に居ることは出来なかった。

城内の人間すべてが自分を嘲笑しているように感じて、誰のことも信じられなくなった。

居場所を失った理央は、衝動のままに城を飛び出し、王都を出て、襲いかかってくる魔物達相手に覚えたばかりの剣と魔法を振り回した。

「……約定を」

神の声が聞こえたのは、同朋の血の海に恐れをなした魔物が引き、その海の中で理央が眠りに落ちた時のことだ。

はじまりは、純粹なものだった。

時の勇者と当時のハイグレード国の姫が恋に落ちた。

ただ、それだけのこと。

彼の勇者はその役目を果たし、その後も騎士団長となり国を護った英雄として語り継がれている。

彼らは、死に引き裂かれるその時まで仲睦まじい夫婦となった。

いつからだろう。我が子らがあのように歪なことをしはじめたのは今まではそれでもよかった。わたしの選んだ彼らは、皆純粹な強き心を持っていたから、利用しようと思いついた我が子らも、いつしか彼らを本当に好きになっていった。だから見てみぬふりをしていった。

だが

「……………くっ、…っふ……………」

うずくまり、肩を震わせて泣く彼女。

嗚呼、夢の中でまで泣くのか。

わたしはゆっくりと彼女に近づく。その頭を撫でてあげたかった。肩を抱いて、慰めてやりたかった。

だが、彼女はそんなことを望んではいないだろう。欲しいのは

「……約定を」

彼女の肩が、びくりと揺れる。そろりと上がった視線は、怯えに満ちていた。

そう、彼女に必要なのは慰めなどではない。

「魔竜を倒せば、貴女を元の世界に還してあげられます」

「……本当？」

「はい」

この姿では、頷いて見せても彼女には伝わらないだろうと声に出す。

ああ、彼女の瞳から流れる涙の、なんと美しいこと。

何故、我が子らはこんなことにすら気付かないのか。いや、きっといつかは気付くのだろう。そして嘆くのだ。気付けなかった自分を。

悔やむがいい。

どろりと、黒いものが溢れ出し、空間がそれに呼応するかのよう闇を濃くする。

嘆き、悔やみ、我が身を呪えばいい。

わたしが選んだ彼女を傷つけた罪、その身をもって知れ。

神が慈悲深い生き物などと、
一体誰が決めた？

9 (後書き)

神までヤンデレ化。

初登場の時と全然性格違う感じですが内心はこんな感じ。あれは勇者向けの顔。

神からしてみればあれだけ落ち込んでいた勇者が元気に怒ったり噛みついたりしてくるのが嬉しくて仕方ないのです。

王都の門を守る兵士達に敬礼で迎えられる中、理央が馬で門をくぐった途端、爆発のような歓声が湧き起こった。

「勇者様だ！」

「勇者様が帰還なさったぞ！」

「勇者様、万歳！」

正門から城へとまっすぐに続く道の両脇には、勇者一行を一目見ようと民衆が群れをなしていた。

わあわあど勇者を見て思い思いに叫ぶ者。花の雨を降らせる者。理央は馬が興奮しないよう宥めながら、慎重にその中を進んだ。

馬上にいるおかげで、人々の顔がよく見えた。大人も子供も皆、笑顔で理央に手を振っている。

何故か、視界がぼやけた。

「……………」

「勇者殿、余り速度を落とされては……………」

「え？」

理央の横に馬を寄せてきた兵が、理央の顔を見て言葉を失う。どうしたのだろうか。余りにも顔を凝視するもので右手を顔にやると、頬が濡れていた。

泣いていたらしい。

「あ……ごめんなさい」

「ついえ、こちらこそ申し訳ありません。女性の顔を凝視するなど……」

慌てたように目を逸らす兵は、確かカーウエル隊長と呼ばれていた。参謀長の信頼も厚く、この隊の指揮を任された人間だ。

「余り速度を落とされませんよう、お願いします」

「はい、分かりました」

改めて注意され、理央は手綱を握り直す。理央の馬となっている白馬が、ぶるぶると鼻を鳴らした。そのまま元の位置に下がるかと思いきや、カーウエル隊長は理央に話しかけてきた。

「勇者殿……ありがとうございます」

「は？」

しかもそれがされる覚えのない謝辞だったもので、間抜けな声が出てしまう。だがカーウエルは真面目な顔を崩さず、目礼した。

「私達をお救いください、ありがとうございます」

「……いや、そんな」

言葉が見つからない。そんな風に言われたら、理央がこの国の人々のために頑張ったみたいではないか。理央は

「……今回の勝利は、皆さんの尽力のおかげです。私1人では、到底なし得なかった。

だから、そんな風にお礼など言わないでください」

理央は、自分のために頑張ったのだ。

『勇者の答え』をすらすらと口にしながら、理央は瞼を伏せた。

何故だか、胸が痛む。この痛みの理由は、なんだろう。

罪悪感か、それとも苛立ちか。

多分、気付かない方がいい類のものだと思った。

「勇者殿。ここに居る人々の中には、私の妻や娘もいます」

理央が胸の痛みから目を逸らそうと苦心していると、カーウェル隊長が尚も話しを続ける。

理央は黙って耳を傾けた。

「私の家族だけではない。連合軍の兵士達にも、帰るべき場所や待っている人がいる。

勇者殿、謙遜するのは構いません。ですが、その者達が貴女に贈る感謝の念を、笑顔を、どうか否定しないでください。

…私共の想いを、拒絶しないでください」
「……………」

苦しそくに顔を歪ませて、懇願するカーウェルに、理央まで苦しさを覚える。

『……貴女は、私の世界に影響を与えすぎたのです』

ああ、こういうことなのか。

セイヤレイ、一人や二人の問題ではない。王都で理央を迎えた人々だけでない、世界中の人が、理央を想う。その想いが、理央の足枷

になる。

ようやく、理解した。

そして、絶望する。

(……ねえ、)

空を仰ぐ。広がる青空は、故郷となにも変わらない。

その青空の向こうで、きっと自分を見ているのだろう神に、心の中で理央が問いかけた。

わたしは、どうしたらいいの？

答えは、当然のように返ってこなかった。

11 (前書き)

お気に入り登録や評価、ありがとうございます。

今回は隊長から見た勇者様を書いてみました。

娘がいるからだろうか。

リヒト・カーウエルの目に、リオウ・ハヤサカは華奢な身体に重すぎる荷物を背負わされた、哀れな少女にしか見えなかった。

凱旋した勇者を迎えた王都は、凄まじい熱狂に包まれていた。人々の感謝や、笑顔 全てが、斜め前で馬を歩かせている少女へと注がれている。そう思うと、胸に熱いものがこみ上げる。

『化け物』

少し前まで、彼女はそう呼ばれていた。

魔物の群れと相対しても息一つ乱さず、傷一つ負わずに全滅させる姿を見て、そう評したのだろう。

自分も彼女の能力をはじめて間近で目にした時、正直恐れを抱いた。一騎当千、どころの話ではない。

しかしそれは戦闘の時だけのことだ。確かにこの年頃の少女にしては肝が据わっていたし、独特の雰囲気纏っていたが、彼女はリオウ・ハヤサカはただの少女だった。

弱音ひとつ吐くこともできない、不器用な少女。

「……………？」

一生忘れることなどできない光景に感動していると、不意にリオウの馬の足が遅くなった。

戦いでは一己大隊の力を発揮する彼女だが、馬術はそれに比べると少し心許ない。

何かあったのかと慌てて馬を寄せれば、彼女の頬に一筋の涙が流れていた。

「あ……………ごめんなさい」

「ついえ、こちらこそ申し訳ありません。女性の顔を凝視するなど……………」

涙を見て、ただただ美しいと感じたのははじめてだった。

吸い寄せられる視線を無理やり外し、謝罪する。失礼なことをしてしまった。

「余り速度を落とされませんよう、お願いします」

「はい、分かりました」

口にした注意は、取り繕ったように聞こえてないだろうか。

そつとりオウの様子を窺うが、リヒトの注意に従い手綱を握り直す姿はいたって真面目だった。

そう、彼女はとても生真面目な人間でもあった。

真っ直ぐと前を見据える凜とした横顔を、眩しい思いで見つめる。

きつと、リヒトとこうして近くで見つめることができるのも、あと少しだろう。

「勇者殿……………ありがとうございます」

だからだろうか、気がつけば胸の内に閉じこめていたはずの想いを、口にしていた。

突拍子もない言葉は、案の定リオウに理解されずに彼女は虚をつかれたような顔になる。だから、リヒトはもう一度同じ言葉を繰り返した。

「私達をお救いくださり、ありがとうございます」

もう一度、万感の意を込めて。この場にいる全員の思いと同じ言葉を。

ずっと、言いたかった。この世界に来てくれたこと、自分達と共に戦ってくれたこと。

なのに言うことが出来なかったのは、こうして彼女が戸惑った顔をするのを、なんとなく理解していたからだろう。

「……今回の勝利は、皆さんの尽力のおかげです。私1人では、到底なし得なかった。

だから、そんな風にお礼など言わないでください」

ああ、やはり。

『勇者』として答える彼女に、リヒトは悲しくなる。

人々が彼女を求めれば求めるほど、彼女は『勇者』という殻に閉じこもってしまう。

分かっている。周りの期待が、重圧がそうさせたのだ。

確かにリヒトを含む連合軍は、今回の戦の勝利に貢献しただろう。

だが、それも彼女の存在があつてのことだ。

魔物の群れに恐れをなすことなく、先陣をきつて向かっていくリオウに、当初陰で彼女を「化け物」呼ばわりしていた兵士達も、いつの間にか彼女を畏怖ではなく尊崇の目で見えるようになった。

彼女がいたからこそ、自分達は生きて帰ることができたのだと、連合軍の兵は皆知っていた。

そしてそれは強大な力によるものではなく、彼女が彼女であつたからこそなし得たことだとも。

勇者など、彼女の肩書きの一つにすぎない。

(きっと、貴女は知らないのだろう)

我々の想いを。

ならば少しずつでもいい。彼女が、いつか受け入れてくれる日まで自分達が想いを伝え続ければ、あるいは。

「勇者殿。ここにいる人々の中には、私の妻や娘もいます」

そうして、リヒトはゆっくりと語りはじめた。

どうか、拒絶しないでほしい。ただそれだけを、子供のように願いながら。

11 (後書き)

リヒトさんは妻帯者。

でも作者の中では今の所、男性陣の中ではダントツにいい男です。
いい旦那さん。

しかし性別問わずなら多分主人公が一番男前。

セイは馬を走らせ、理央より一足先に王都に入っていた。祭りの賑わいを見せる城下町に余所見することなく駆け抜け、セイが訪れたのは、ある一軒の屋敷。

赤レンガの壁を蔦が飾る、將軍の地位にいる人間が住む場にしては少しこじんまり印象のあるそこは、ロドル・ゴラント所有の屋敷である。

「セイ！」

呼び鈴を鳴らすまでもなく庭に出ていた夫人と子供達に見つかり、熱烈な歓迎を受けた。

「まあまあ、大きくなって！」

「セイだー！」

「リオウは？いつしょ？」

とても二児の母親とは思えない美貌のゴラント夫人がセイを抱きしめ、その周りを子供達がくるくる走り回る。セイはまず全く変わっていないゴラント家の様子に安堵し、自分がここに来た経緯を説明した。

「お久しぶりです、クリステイーナさん。ゴラント將軍から手紙を預かったので、お忙しいリオウ様に代わり自分が届けに来ました」「まあそうなの。うちのバカが面倒押し付けてごめんなさいね。

ほら、立ち話もなんだし家に入って入って！ レイもきつと喜ぶわ！」

夫人に笑って促され、セイは屋敷の中へと入った。

+++++

「レイ、入るよ」

双子の弟が過ごす部屋の扉を、ノックしてから開ける。

「……セイ？」

部屋の主は、驚きをもってセイを迎えた。ベッドの上でまた本を読んでいたのだろう弟に対してセイは笑顔を浮かべる。

「ただいま、レイ」

「帰ってきたの？リオウ様も？」

双子の兄のことよりもまずリオウのことを気にする弟に、セイの笑顔が苦笑に変わる。

離れていても近くにいても、自分達にとってはリオウが至上的なことに変わりない。それを再認識する。

セイは寝台の縁に腰を下ろし、ゴラント夫人らにも話した経緯を繰り返した。

「將軍から手紙を預かって、僕だけ先に王都に入ったんだ。リオウ様ももうじき王都に入るはずだよ」

もつとも、ここに来るのはかなり後になるだろうけど。

細かな部分は口にせずとも伝わったらしく、レイは人形のように整った顔を悲しげに歪めた。

「そう……戦いは終わっても、リオウ様は解放されないんだね」
「ああ……」

王城のある方向へと視線を向ける。そこにあるのは壁だったけれど、セイの脳裏にはしっかりと城の姿が浮かび上がっていた。

隻眼に浮かぶのは、はつきりとした嫌悪。

セイもレイも城に入ったことなどない。けれど、リオウのことを思えば 出会った頃の人と、その周りの状況を見れば、そこが良い場所であるとは到底思えなかった。

「……護らなきゃ、ね」

「そうだね。僕達が、リオウ様を護るんだ」

どちらからともなく、囁きあう。

これまではリオウに護られるばかりでいたが、これからもリオウの傍にいるためにはそんなことではいけない。

そっと、手の平を合わせる。1日の殆どを家の中で過ごすために白くて細いレイの手と、リオウに付き従った半年以上の時間のおかげで日に焼け、ごつごつとしたセイの手。

「僕の足は動かないから、知識で」

「僕はレイの分も、リオウ様の傍で」

「あの方の、盾となり剣となる」

全ては、あのやさしい人のために。
半年以上前に立てた誓いを復唱した彼らは、そっくりな微笑を浮かべた。

どれだけ汚泥を被せられようが、世界中の人間に罵倒されようが構わない。
貴女が、そこにいてくれるなら。

「勇者、リオウ・ハヤサカ殿、入場！」

若干ハヤサカの部分が言いにくそうな侍官の声に続き、扉の前に控えた衛兵が手にした金属製の杖を打ち鳴らす。

そして、目の前で重い音を立てながら開かれていく扉を、理央はどこか他人事のような気持ちで見守った。

一年前も、こうして玉座へと続く赤い絨毯の上を歩いたっけ。限られた者しか歩くことは許されない赤い道を踏みしめながら、理央は思い出す。

あの時の理央は当然こちらの作法など知らず、謁見の間にいた一部の者は、そんな理央を人間社会に紛れ込んだ猿でも見たような目で見下ろしていた。

被害妄想と思われるかもしれないが、理央は実際に彼らが、野蛮な娘だなんだと陰口を叩いているのを耳にしている。

今の自分は、あの時の彼らの目にはどう映るのか。ふとそう思ったが、すぐに考えても無駄なことだと頭の中で処理される。

嫌悪されようが歓待されようが、どちらでも構わない。むしろ、理央の状況を鑑みれば嫌われた方が好都合のような気がした。嫌がらせをされるのはごめんだが。

多分理央は、放っておいてほしいのだ。

(……………つと、)

頭の中に気をとられて、所定の位置まで来ていたことに気が付き理央は足をとめ、跪いた。

段になっている場所から、三步下がった位置。それが、理央に許された距離だった。

煩わしいと、思う。

細々とした作法も、こういった場のために詭えられた、装飾過多な勇者の鎧も　すべて。

「……………顔を上げよ」

絨毯を見つめていた理央は、囁れた声に少しもつたいぶつてから顔を上げる。

壇上の王は、相変わらず玉座ではなく寝台の上で大人しくしておいでくださいと懇願したくなるような風貌だ。確か、理央の祖父より少し上ぐらいの年齢だったと記憶しているが……………それよりもっと年上に見える。

老けて見えるのは、個人の体質のせいか、環境のせいか　老王を見つめながらそこまで頭を巡らせた理央は、思いの外見つめすぎたことに気付いて慌てて視線を少し下にずらす。

余所見をしても不敬だが、真っ直ぐ見つめすぎても不敬に当たる。本当に七面倒なことだ。

「リオウ・ハヤサカ。

そなたの此度の戦での活躍、まことに見事であった」

声量が控えめな王の言葉は、王の言葉を聞き漏らすわけにはいかない周囲によって、他の音を退ける効果を持つ。

しんと静寂を保つ謁見の間に、陛下の声が響いた。

「そなたは我が国だけでなく、世界をも救ってくれた。まずは、そのことに謝辞を」

バツという音と同時に、王のそばに控える宰相をはじめとする臣下達、その両側に並ぶ貴族達、そして、衛兵達が一齐にそれぞれの最上級の礼の形をとる。

「ありがとう、リオウ。そなたの名を、我々は子々孫々の代まで語り継ぐことだろう」

重そうな瞼の奥にある青い瞳で王はまっすぐに理央を見下ろし、謝辞を述べた。

「そして、その働きを評してそなたに褒美を与えよう」

その申し出には思わず「は？」と素で返しそうになり、表情を取り繕う。

(褒美……)

そういえば、ここに来るまでの道のりでもそのことは匂わされていた気がする。

全く気に留めていなかったが。

「なにか欲しいものはあるか？」

陛下に答えを促すように言われたが、理央は黙り込んでしまう。

欲しいもの　と言われてとっさに思いついたのは、元の世界に帰

してほしいという願いだった。だがそれはすぐさま却下した。

召喚の儀とは神殿の神官が執り行うものだが、彼らだけでは召喚を成すことはできない。

神官達の行う儀とは、勇者を直接召喚するものではなく、神へお伺いをたてるものだからだ。勇者を喚びたい神官達が儀を行うことにより神に願いが届き、願いが聞き届けられた場合のみ神が異界から勇者たりえる人物を連れてくることができる。

つまり喚ぶのも還すのも、最終的な決定は神が下すものなのだ。

そしてその神は現在、理央を帰すことはできないと判断している。更に、理央を帰すと両方の世界に悪影響が出ると言われている今は、下手なことはできなかった。

いつまでも答えを出さない理央に、謁見を見守っていた者達が小波のように揺れるのを感じる。

「 リオウ? 」

「 …身に余るお言葉、光栄に思います。 ですが、欲しいものと言われても… …すぐには思いつきません 」

周りの空気に押し出されるように、言葉を選び口にする。

とりあえずは保留にしておいた方がいいだろう。後回しにしたところで、欲しいものが出てくるかどうかは分からないが。

「 そうか。 まあ、急ぐ話でもない。 褒美の話はまた後日として、今日のところはゆっくりと休むがいい 」

「 ……ありがとうございます 」

目を閉じ頭を垂れる。

そうすることでより一層強く感じた一対の視線に、理央は気付かない振りをした。

14 (前書き)

今回かなり短いです。

「もういいんです」

そう言つて、彼女は微笑んだ。

「もう、いいですから」

血まみれの姿で、何もかもを諦めたような、突き放すような彼女の声と笑顔は、今でもヴェリオスの脳裏に焼き付いている。

「勇者、リオウ・ハヤサカ殿、入場！」

彼女がこの謁見の間に入ってきた瞬間、その場にいた誰もが、息を呑んだ。

王族も、貴族も兵士も関係なく、一瞬にして彼女に　　リオウに目を奪われた。

赤い絨毯の上を迷いのない、威風すら感じさせる足取りでこちらに歩んでくる彼女は、一年前にもこの道を歩いた少女とは別人のように見えた。

　　こんなにも、美しかったか？

ヴェリオスは立場も忘れてリオウをひたすらに目で追っていた。幸いにも他の者もヴェリオスと同じようにリオウに魅入っていたので、

誰に見咎められることはなかった。

真っ黒な髪と瞳、白い肌。背は少しのびただろうか？

髪が短かったこともあってか、少年のようにも見えた中性的な顔立ち、女性らしいまろみ加味されたことでどこか危うげな艶を感じさせ、彼女のために詭えられた白地に金の装飾がなされた硬質な鎧も、彼女の女性的な身体の線をむしろ引き立てていた。そして、凜とした輝きが宿る黒い瞳は、見るもの全てを魅了するだろうと確信を持って言える。

戦女神がいるとすれば、きっとこんな姿をしているのだろう。ヴェリオスの呆けたような視線は、彼女が定められた位置で跪くまで注がれ続けた。

「……………顔をあげよ」

父王が、リオウへと声をかける。魔竜の死の報せを受けてから、父王の衰えていくばかりだった体はゆっくりと快復の兆しを見せていた。

囁れた声も僅かだが力を取り戻しているように聞こえる。

自分もたらした変化を、果たして彼女は気付いているのだろうか。許しを得たりオウが、少しの間をおいて顔をあげる。

その視線をまっすぐに受けることができた父を、ヴェリオスは羨ましく思ってしまった。ヴェリオスは玉座の隣に立っていたのに、彼女がちらりともこちらへ視線を向けなかったせいだろう。知らない仲でもないのだから、少しくらいその瞳に自分を映してくれたとて構わないだろうに。王がリオウに言葉をかけるのを聞きながら、苛立たしいようなむずがゆいような、そんな気持ちにとらわれていた。

この気持ちはなんなのだろう。とにかく彼女に自分を見て欲しかった。

あの頃のように、馬鹿みたいに自分を目で追っていれればいいと思うのに。彼女はその日、ヴェリオスに何も与えることはなかった。

14 (後書き)

丸無視される王子様。

その日、ハイグレードの城は俄かにざわめいていた。

勇者として召喚された少女が、何を思ったのか城から消えた。そのことを知った者達は、まさか逃げ出したのかと騒然となったが、一夜明けてあっさりと戻ってきた彼女に城内は更に騒然となった。

彼女は全身血まみれになって帰ってきた。

聞いた話によれば、彼女は王都の周りの魔物を一掃してきたそうで、全身に纏う血の殆どが魔物の返り血だったという。ヴェリオスは、偶然にもその場に居合わせたのだ。

「勇者さま！ お怪我は……っ」

周りが遠巻きに勇者を見る中、女官長がリオウに走り寄る。

「……女官長、さん？ ごめんなさい、服、汚してしまっ……っ」
「っそんなこと、どうでもよろしい！ さあ、早くお部屋へ！」

血まみれの勇者を一喝し、野次馬を視線で蹴散らした女官長がリオウを連れて行くことを見るのを見て、ようやくヴェリオスの唇が動いた。

「リオウ……」

その時の自分は一体何を言おうとしたのだろう。それは、きっと一生分らない。

何故なら彼女の視線がこちらを向いた途端、ヴェリオスの体は再び金縛りにあつたように身動きがとれなくなったからだ。

ぞく、

戦慄というものを、ヴェリオスはこの時はじめて感じた。

「……殿下」

ヴェリオスの姿を見留めた理央の瞳が、すうつと色を薄くした。いつも少女らしい甘やかな色を含んだ瞳も、声も、あの瞬間から自分に向けられることがなくなったのだと、ヴェリオスは後に知る。

だがこの時のヴェリオスはリオウのそんな変化すら察知できずに、愚かにも彼女に手を伸ばした。

しかし、

「汚いですよ」

すい、とリオウはその手を避けた。

愕然と自分の手とリオウの顔を見たヴェリオスに向かって、リオウが微笑んだ。

今までに見たことのない笑みだった。

そして、今までで一番美しい彼女だった。

綺麗に弧を描いた唇を動かして、リオウは言った。

「もういいんです」

噛んで含めるように、誰かに言い聞かせるように。
それは、ヴェリオスにか彼女自身にか、今でも分らないけれど。

「もう、いいですから」
ただ、拒絶されたことだけは感じた。

「……殿下、ヴェリオス殿下」
宰相の声に、ハッと現実に引き戻される。

「…あ、ああ。何の話だったか」
「明日の祝勝会のことです。」
リオウ様のエスコートは殿下が務めるといっことで、よろしいですね？」

「…ああ、分かった」
そう、執務室で明日行われる祝勝会の最終確認をしていたのだった。
訝しげな宰相に気にするなと手を振り、頭を巡らせる。

（エスコート、か）

明日の祝勝会には我が国の者だけではなく、周辺国の王族や重要人物が参加する。
主役は勿論リオウだ。
そして、彼女のエスコートは自分が務める。そのことに、何故か心が湧き立つ自分がいた。
謁見では視線ひとつあわなかったが、エスコートとなれば視線は勿

論、言葉も交わすし体だつて

「……………」

謁見の間で見たリオウの姿が頭をよぎり、ヴェリオスは頭を振った。今更、初心な少年でもあるまいし、少し腕や肩やらが触れるのを想像しただけでこんな風になるのはおかしい。

「殿下？」

「い、いや、なんでもない。そうだ、リオウには話を通してあるのか？」

「え？ ええ、女官長がお伝えして、準備も滞りなく進んでいるようです」

「そうか……………」

さつきから赤面したり安堵したりと忙しいヴェリオスの顔を、妙なものを見るような目で見ていた宰相が少し悩む素振りを見せてから、口を開く。

「殿下……………勇者殿にはもう謝られたのですか？」

「謝る？ 何をだ」

「前にも申したでしょう。しきたりによって勇者殿を利用しようとしたことを謝罪した方がよいと」

「ああ……………」

またその話か。

うんざりしたような気持ちで、何度も繰り返した反論を口にする。

「しかし別にリオウはそのことを知らないのだから、わざわざ謝る

こともないだろう」

一年前、リオウが召喚された時、ヴェリオスはある役目を任された。勇者の枷となる役目だ。

髪と瞳の色が珍しいくらい今の今いちパツとしない少女に甘い言葉を囁いたり一々気を遣ったりしないといけないこの『仕事』は正直ヴェリオスにとって面倒だったが、これも国のためとヴェリオスは役目を放り出すことはなかった。

目の前にいる宰相はそんなヴェリオスに、その頃から苦い顔をしていたが。

「知らないからといって罪がなくなるわけではないのです。

しでかした罪はいつか白日のもとに曝される。その時に謝罪したのでは遅いのですよ?」

物怖じせず言うべきことを言い、時には王族さえ諫めようとするこの男は、潔癖すぎるとヴェリオスは思う。

リオウに関しても彼はうるさかった、ヴェリオスの『仕事』を『悪しき慣習』だといい、リオウが城を出て行った時もヴェリオスのせいだと言わんばかりの態度だった。

有能ではあるのだが　その高潔であろうとする精神が、時々煩わしいとも感じる。

「それに　」

更に言い募ろうとした宰相に目をやると、少しの間があつてからため息を吐かれる。

「どうした」

「いえ……なんでもありません。私はまだ仕事がありますのでこれで」

ヴェリオスに背を向け退室していく宰相の言いかけた言葉が僅かに気にかかったが、まあいいかと黙って見送る。口にするのもくだらないことだと自分で気付いて引つ込めたのだろう。

執務室に1人になったヴェリオスは、窓の傍に立ち、中庭を見下ろす。

ヴェリオスは、間違ったことなどしていないと思っている。むしろ、自分は正しいことをしたのだと。

宰相はリオウを一人の人間として扱いたいようだが、それがなんのためになるというのか。

ついこの間まで世界は魔竜と、その軍勢に苦しめられていた。ヴェリオスが役目を放棄し、リオウが勇者として勤めを果たさなければ今も尚その状態は続いていたのかもしれない。

現に今のような慣習が生まれるまでは、勇者を喚びだしたものの全く務めを果たさない者もいたと記録に残っている。

世界の敵を退ける。それが、勇者の存在理由なのに。

「何をごちゃごちゃと……」

リオウのためにも世界のためにも、これが一番良い道だったのだと、ヴェリオスはそう思っていた。

彼は知らない。自分の心も、彼女の心も。

『……もう、いいですから』

あの日彼女が言った、言葉の意味も。

「お帰りなさいませ、リオウ様」

「……………お久しぶりです、フィアンナさん」

ただいま、と言えない自分は、やはりひねくれているのだろう
と思った。

謁見を終え、城内にあてがわれた部屋へと案内された理央を迎えたのは、女官長のフィアンナ・シエンマルトニーだった。

普段にこりともしない上に、少しつり上がった目尻が厳しそうな印象を与える彼女だが、城にいた頃世話になった理央は、彼女が暖かな人物であることを知っていた。

思えばこの人には大分苦勞をかけた気がする。主に礼儀作法とか、人間関係とかの面で。

「早速ですが、湯殿の用意が出来ておりますのでまずはそちらで長旅の汚れを落としてください」

だからだろうか。彼女にはどうも逆らえない。断ることの出来ない雰囲気を醸し出すフィアンナに、理央は引きつった笑みを零した。

「あの、自分で洗えますから」

「いいえ、そういうわけには参りません」

「フィアンナ様の御命令ですので！」

「諦めてください」

1対3。これが魔物相手なら相手の数が十倍になっても負けない自信があるのに。

脱衣場でお仕着せを着た女性3人にじわじわと迫られながら、理央はそんなことを考える。どうしよう、勝機が全く見えない。

人に体を　しかも比べるのも馬鹿馬鹿しいくらい自分よりも綺麗な女性3人に洗われるなんて、苦痛以外の何物でもないというのに引く様子を見せない女官達に、どうにかこの場を逃げ切れないものかと考えを巡らせた時だった。

「っ今よ！」

「え……うわっ」

どたばたどすん。

金髪の女官の合図により、他の女官2人が抑えにかかってくる。下手に抵抗して相手を傷付けたらどうしようという不安からろくな抵抗も出来ずにいると、今度は服を脱がそうと手がのびてくる。

「あつ、ちよっ」

「はいはい、大人しくしてくださいねー。わあ、肌きれー」

「傷一つないですね」

「あら本当」

「ひゃっ?!」

あらぬところを触られ素っ頓狂な声が出る。服を脱がすのにどうしてそんなところを触る必要があるのだろうか。

「っわかりました、大人しくしますから！だから、せめて服は自分で脱がさせてください……」

ぶにぶにとあらゆるところをつつかれた理央が諦めて譲歩の提案をすると、女官達は一斉に不満げな声をあげながらも渋々ひいてくれた。

彼女達は仕事だというけれど、理央には面白がっているようにしか見えなかった。

その後の風呂場での攻防は割愛しておく。部屋に戻った理央の頭のとつぺんからつま先まで磨き抜かれた姿を見れば、軍配がどちらにあがったかなど誰が見ても一目瞭然だっただろうけれど。

バスローブのようなものを着せられたぴかぴかの理央を見て、やはりにこりとはしないまでも満足げに頷いたフィアンナは、「ではこちらをお召しになってください」と当然の流れのように理央にあるものを差し出した。

「……なんですか、これ」

「ドレスです」

「はあ……」

見れば分かる。

レースやらなんやらできらきらしい白い布の集合体は、まさか普段着ではないだろう。

よくよく見ればきらきらしいのは小さな宝石が布に縫い付けられているからで、こんなので外を歩けば一瞬でこれ着た令嬢ごと盗まれるだろうなあと考えながらドレスを眺めていた理央は、フィアンナの言葉を思い出し「ん？」と首を傾げる。

『では、こちらをお召しになってください』

と、いうことは

「え、私が着るんですか？」

「貴女以外誰がいるんですか」

「……女官さん？」

多分理央よりもずっと美しく着こなすことだろう。理央の後ろに控えていた女官達を見れば、とんでもないと言わんばかりに首をぶんぶん横に振っていた。

「……明日行われる祝勝会のことは聞いていますね？」

こちらはそのためにならされたドレスです。直しもありますので一度試着してみてください」

明日の祝勝会。そのために作られたドレス　それを着る自分。理央の頭の中でようやくすべてが繋がる。

「私、明日ドレス着なきゃいけないんですか！？」

しかもこんな盗賊ホイホイみたいなドレスを身につけて？

驚きを露わにする理央に対し、フィアンナは呆れた風のため息を吐いた。

「ドレスでなければ何を着るおつもりだったのですか」

「いや……鎧を」

「……どこの世界に、晩餐会で鎧を着る女性がいますか！！」

びりびりと大気を震わすような怒声を浴びて、理央は肩を飛び上がらせる。

この怒声を浴びるのも久しぶりだった。

「全く……貴女は自分が女性であると自覚していないのですか」

「う……すみません」

フィアンナの言葉が胸に突き刺さる。自分が女らしくないことなど百も承知だが、人にそれを言われると結構イタい。そして自覚しているために反論も出来ない。

はあ、と俯き気味に溜め息をついた理央だが、続いて聞こえてきた言葉に息を呑む。

「……貴女はもう勇者としての務めは果たしたのだから、鎧だとか剣だとか、そんなものからは離れてください」

「フィアンナさん……」

「私が、一体どれだけ心配したことが……っ」

常でない弱々しい声で吐露するフィアンナの目からは、ぼろぼろと涙が零れていた。

そつと、理央は震える肩に手を添える。

「ごめんなさい、フィアンナさん……ありがとうございます」

ずつと、心配させていたのだ。

フィアンナは理央を理央として見てくれた数少ないひとだった。あれこれうるさく言うけれど、それら全ては理央のためのものだといいことは、ちゃんと知っていた。

(「ごめんなさい……」)

泣き出したフィアンナの、思いのほか小さな背中をさすってやりな

がら、理央はもう一度心の中で謝った。

どんなに心配されようが泣かれようが、きっと自分はまたこの人を裏切ってしまうだろう。そんな確信があったから。

16 (後書き)

理央さんは女性に弱い。

「つつかれた……」

ベッドに倒れ込むと、多分国内でも最上級なのだろう寝具が極上の柔らかさで迎えてくれる。

泣き出してしまったフィアンナを宥めた後、ドレスを試着して直しの手配をして　その他諸々の用事を済ませてようやく理央が解放された頃には、日はとっぷりと暮れていた。

長い1日だった。そして明日も、きっと長いのだろう。

「祝勝会、か」

多分軍の人達がやってたどんちゃん騒ぎみたいなのとは違うんだろうなあ……

名は同じでもかなり内容というか雰囲気は異なるだろう。なにせハイグレードだけでなく周辺国の王族まで招いているという話だ。それに加え、理央が試着したドレスの煌びやかさ、更に王子様のエスコート付きということを考えれば、多分フィアンナの言うとおり祝勝会というより晩餐会と言った方がイメージがしっくりくる筈だ。

「……逃げたい」

女官達は下がらせ、1人になった理央はベッドの上で仰向けになっ
たまま呟く。

逃げられるものではないと、分かっているけれど。でも、口に出さずにはいられない。

自分が祝勝会の主役であるのも、王族やら貴族やらが集う中に珍獣よろしく放り込まれるのもそうだが、何より　王子殿下のエスコート付きというのが、理央の心を重くする。

謁見の間では無視を決め込んだのに、まさかこんなイベントがあるなんて　理央は目を閉じて、彼の顔を思い浮かべてみる。

もうずっと前に見たきりの彼は、記憶の中ですっかり臃気になっていた。

ヴェリオス・リア・ハイグレード。理央を利用した彼に対し、理央は怒りだとかそういつた感情は不思議と抱いていなかった。

それは、決して短くはない時が理央の棘を和らげたのかもしれないし、勇者として過ごす間に、特殊な立場に立つ者の事情というものを身をもって知ったからかもしれない。

だが、だからといって許しているわけでもないのだ。

本当は、できればもう顔も見たくないとすら思っている。彼の顔を見れば、愚かだった頃の自分を思い出して自己嫌悪に走ってしまいたい。そうで。こういう感情を、なんて言えばいいのだろう。

謁見する間、ずっと感じていた視線の意味は分からないし、彼がどんな顔で自分を見ていたのかも知らない。でも、そんなことはもうどうでもよかった。

寝ころんだまま、目を腕で覆った理央の心に浮かんだのは、あの日ヴェリオスに向けたのと同じものだった。

(もう、いいから……)

理央は魔竜を倒したのだから、縛り付ける理由も無くなったはずだ。

もういいから、わたしに構わないで

それが、理央が彼に願う、ただ一つのこと。

女官達の腕前はすごかった。

城で一夜を過ごし、翌日の昼から夜に行われる祝勝会のために準備をはじめた理央　　というか女官達は、自らが磨き上げた理央の姿を絶賛した。

「とてもお美しいですわ、リオウ様」

「凜として、艶やかで」

「その上お可愛い」

昨日今日と風呂場で理央と攻防を繰り返した三人官女は鏡にうつった理央にうつとりとした視線を送る。今日も息ぴったりなようでありだ。

(まあ、確かに……見違えるくらいにはなった……かな)

理央も鏡の中の自分に目をやる。華美な白いドレスを身に纏った理央は、髪も結び上げられ化粧も施され、別人のようだった。とりあえず剣や魔法をぶんまわすようには見えないだろう。少し窮屈で辛い、これもある意味武装と思えば耐えられる。

「あら、そろそろお時間ですわね」

ひとしきり理央を褒めそやした女官達のうち1人がその声を発すると、一旦は落ち着いたはずの空気がまた慌ただしくなる。

「よいですか、リオウ様。」

何があっても背筋をのばし、まっすぐ前を向く。この2つを守れば、大抵のことはなんとかなります」

「はい、フィアンナさん」

最終確認をしたフィアンナの言葉に理央は頷く。以前もよく背中が曲がっていたり俯いたりしているとすぐさま飛んできた言葉だ。確かにこうしていると、気持ちがいっかりとして揺らぎにくい。城の中だろうと戦場だろうと、まっすぐ立っていられた。しっかりと頷いた理央を見上げた瞳に、うっすらと涙の膜がはる。

「…本当に、お美しくなれましたね」

「フィアンナさんは涙もろくなりましたね」

「誰が泣かせてると思ってるんですか」

理央のせいなのか。

ぐずぐすと鼻を慣らしながら涙目で睨んでくる、母より少し年上なぐらいの女性に向かって、理央は困ったように微笑んだ。

背筋をのばし、真っ直ぐに前を向く。

大広間へと続く扉の前に立ち、理央はフィアンナの言葉を実行していた。

この向こうには、どれくらいの間があるのだろうか。さざめくような話し声が扉越しにも聞こえてくる。

「すまない、待たせたか」

きびきびとした足音が聞こえてきて、理央は顔を横向けた。

「……いえ……」

こちらに向かつて歩いてくる彼を見留めて、理央の記憶の中の殿下の顔が鮮明になる。そう、こんな顔だった。

後ろに数人の共を連れた彼は、正装なのだろう複雑そうな衣装をきつちり着こなし、当たり前だが記憶の中よりも大人びて見える。

顔つきが引き締まった、というのか。物語の中の王子様が、少し現実味を帯びたような印象だ。

久々に見たヴェリオスを観察していた理央だが、向こうも理央のことを見ていることに気づき、首を傾げる。

何か変だったろうか。

「……殿下？」

頭一つ分高い彼の顔を見上げ呼びかけると、ヴェリオスは一拍遅れて反応した。

「……………手を」

何か言いたげに形の良い唇が動いたものの、結局出てきたのはその二文字と、白い手袋に包まれた大きな手だった。

理央も、彼の手に自らの手を重ねることとそれに応える。

理央は再び扉へと視線を戻した。

相変わらず彼からの視線は感じたが、謁見の時と同じように無視を

決め込む。

「では、よろしいですか」

「ああ」「はい」

理央とヴェリオスが頷くと、扉の脇に控えていた者が扉をノックし、向こう側へと合図を送る。

ゆっくりと向こう側から開かれていく扉を、理央は息が詰まりそうな思いで見守った。

ヴェリオスと共に大広間へと足を踏み入れた理央を迎えたのは、いくつもの視線だった。

途端に足が重くなる。以前のように刺々しかったりあからさまに嘲笑を含んでいたりするものは流石に少ないが、これだけの数だろうとたとえ好意的な視線でも理央にとって圧力であることには変わらない。

(100人以上はいるかな……)

登場したのが階段の上であつたので、大広間の様子が理央からはよく見渡せた。

女官や給仕の者達を合わせれば200人近くにはなるだろう。食事の載った丸テーブルが規則性をもって並び、立食パーティーのような雰囲気だ。

ヴェリオスのエスコートに従い、理央は慎重に階段を下りる。本当に理央のために作られたのだとわかるドレスの裾を少し持ち上げて、慎重に、慎重に。

流石は王子様というべきか、そのないエスコートのおかげもあって、理央は特にヘマをすることなく大広間の床へとたどり着くことができた。

「どござ」

階下へ下りた理央達に、給仕の者からソーダ水のような液体が入ったグラスが手渡される。

見れば賓客と思しき人達は皆、グラスを手にしていた。

「陛下に代わりまして、私が発言することをお許しください」

理央から手を離れたヴェリオスが一礼をしてから、よく通る声で広間の人間を見回しながら話し出す。結婚式のスピーチを思い起こさせる殿下の話を、理央は隣で黙って聞いていた。

「では、此度の戦で、我らが連合軍に勝利をもたらしてくれた勇者、リオウ・ハヤサカに敬意を表して 乾杯を」

そう言つて、ヴェリオスがグラスを掲げると広場の面々も同じようにグラスを掲げ、理央もそれに習った。

「乾杯」

いくつもの声が重なり、唱和する。

グラスに口を付けると、炭酸とは別の、灼けつくような刺激が喉に流れ込んで、理央は噎せそうになるのをこらえた。

18 (後書き)

お酒は二十歳になってから。

「勇者殿、私のことを覚えておられるかな？」

「ええ、もちろん覚えています。ロイアネル公爵」

「いやあ、立派になつて」

「覚えていらつしやるかしら。我が国にいらした時勇者殿とお話する機会があつただけけれど」

「ええ、ヘルナウラ夫人」

「勇者殿は」

「勇者様の」

勇者殿、勇者様　そつちこそ理央の名前を覚えてないのでは、とそれぞれ自国を勇者が訪れた時の思い出話を語る面々を見ながら理央は思った。

「というか、ヤバイ。」

理央はぐわんぐわんと揺れ始めた頭をさりげなく押さえ、理央を取り囲む人々の会話をなるべく聞き取ろうと努力した。

祝勝会がはじまってまだ30分も経ってない内に理央が理解したのは、理央に聖徳太子のような能力は備わっていないということ、思っていた以上に自分の対人スキルがないということだった。

（殿下と離れたのは、失敗だったかな……）

乾杯のあと別れたきり、今は人垣のせいでどこにいるのかも分からないヴェリオスのことを考え、理央は慌ててその考えを振り払う。関わりたくないか思っていたくせに、困った時には頼るなんて虫が良すぎる。

自分でなんとかしないと。

そう自分を奮い立たせた時だった。

「リオウ」

名を　しかも呼び捨てで呼ばれたせいか、それとも彼のゆったりとした声質のせいか。その声は、驚くほどすんなりと理央の耳に滑り込んだ。

あれだけ騒がしかった周囲も、その声をきっかけにしん…と静まり返っている。

理央が視線を向けると、その人垣が割れて、1人の人物が残された。

「ノマライト王」

「久しいね、リオウ」

その残された人物は、金色の双眸を細めて理央に微笑みかけた。

ノマライト王　グラエル・ノマライトはまだ18という若さで王位についた、現在25才のノマライトの若き王だ。

ノマライトはハイグレードの隣国であり、理央も魔竜討伐への旅の途中で立ち寄った折り、面識を持っていた。

「迷惑だったかな」

庭に出ると、花の芳しい香りが風にのって理央のもとへと運ばれてくる。

そこでほっと一息つけた理央は、ふるふると首を横に振った。

「いえ……正直助かりました」

正直な気持ちを打ち明けると、華やかではないが精悍に整った顔をくしゃりと歪めた。

相変わらず笑うのが少し下手だ。

「よかった。　　周りに嫌われているこの身も、なかなか役に立つようだ」

「嫌われてる、ということでもないと思いますけど」

彼、グラエルが現れると理央の周囲から潮が引くようにあつという間に人々が消えた。その中にはグラエルを嫌っている人もいたかもしれないが、大半は彼のオーラというか、威風に気圧されたのが殆どだろう。

理央はグラエルの隣に立って、彼を見上げた。身長は理央よりも頭二つ分は高いのでこうして見上げると首が痛くなりそうだ。体つきもがっしりしているため、立っているだけでも妙に迫力がある。

そう、ライオンみたいだと思ったんだ。

初めてグラエルを見た時を思い出す。濃紺の鬘と金の瞳を持つ、ライオン。理央も初対面の時にはその迫力に少し気圧された。

きつと、彼に惹かれてはいても、身分的にも雰囲気的にも近寄りが

たいのだろつと理央は思う。

本人は、穏やかで身分にも余りこだわらない気さくなひとなのに。

「久しぶりだね、本当に。半年ぶりくらいか」

「あ……はい。その節は、お世話になりました」

「いや、リオウが滞在してくれた期間は俺も楽しかったよ」

そう言われても、理央は請われるままに理央が住んでいた世界の話をしたくらいしかした覚えがないのだが。

「言っておくが、社交辞令などではないよ」

理央の頭の中を見透かしたように言葉が飛んでくる。

瞳を瞬かせた理央に対し、グラエルはやはりとでも言うように笑った。

「本当に楽しかったんだ。貴女がしてくれた異世界の話はとても興味深いものばかりだった。

良ければまた聞かせて欲しい」

「ええと……はい」

「じゃあ、約束だ。確かこうだった？」

そう言つてグラエルが差し出したのは、ぴんとたつた小指だった。

一瞬彼が何をしようとしているのか理解できずに目を丸くした理央だが、それが以前理央が教えた故郷での約束の仕方であることに気付いて、嘔き出した。

グラエルが怪訝そうに理央を窺う。

「何か間違っていた？」

「いえ、合っています」

やり方自体は間違っではないのだけれど、大の大人　しかも彼のような美丈夫がやると、なんだか妙に可愛らしい。

笑われていい気がしないのだろう、むっすりとしはじめたグラエルにまだ笑い混じりの声で謝って、理央は小指を絡めた。

「えーと、なんだっけ、あの怖い歌」

「ゆびきりげんまんうそついたらはりせんぼんのます、です」
「そうそれ。」

「ゆびきりげんまん……」

腰にくる、というのはいくつという声を言うのだと理央に教えた美声が真剣に唄うのが理央の故郷の童歌。

理央はまた笑いを堪えなければならなかった。

「ゆーびきった。……これでいい？」

「はい」

頷き返し、指が離れる　だが、離れたはずのグラエルの手が、理央の手を包み込んだ。

「陛下？」

「……陛下だけじゃ、誰を呼んでいるのか分からないな」

「……ノマライト王？」

「……どうしてそっちへ行くんだろう。」

まさか俺の名前忘れてる？」

「いえ……グラエル、陛下」

「ん、よくできました」

満足げにそう言ったグラエルが、繋いだ手をぶらぶらと揺らす。

「リオウは、これからどうするんだ？」

「これから……?」

「そう。すぐに元の世界に帰るの?」

問いかけに、理央は瞼を伏せた。

グラエルは、理央の願いを知っていた。彼に故郷のことを話す内、郷愁に駆られてうっかりとこぼしたことがあったのだ。「帰りたい」と。

「それは、しばらく無理みたいで」

「何か問題でも?」

「まあ、そんな感じですよ」

そういえば、彼も理央をこの世界に留める枷となっているのだろうか。理央の手を包み込むようにしているグラエルの手を見ながら考える。

嫌われてはいないと思うが……そこまで執着されているとも思えない。

(…私がいなくなったら悲しむ人が、世界を歪める、だっけ)

神が言っていたことを思い出す。理央がいなくなったらグラエルも悲しんでくれはするだろうけど、世界に影響を齎すほどとは思えなかった。そもそもグラエルがそういう人間ならば、「帰る」「帰らない」の話をした時にもっと取り乱したり悲しんだりするのではないか。

ぼーっとしてるようにも真剣に考えことをしているようにも見える

彼の表情を窺っていると、視線に気付いたグラエルが首を傾げる。

「リオウ？」

「……グラエル陛下って、不思議なひとですよね」

「変、とはよく言われるけれど。不思議と言われたのははじめてだ」

何故そこで嬉しそうにするのか。

やっぱり不思議。と、理央が心の中でグラエルの位置をとりかねていると、そっと手が離される。

「……あんまり主役を独り占めにするものじゃないね」

どうやら話している内にそれなりに時間が経っていたようだ。理央も遠巻きにこちらを窺っている視線の数を感じて、グラエルに笑みかける。

「ハイグレードにはまだ滞在なさるのですよね」

「ああ。約束、忘れないように」

「はい」

また広間の方へと戻ろうと踵を返した理央を、気遣わしげな声が続ってくる。

「……大変だろうけど、がんばって」

振り返ると、グラエルがやっぱり下手くそに微笑んでこちらに手を振っていた。

19 (後書き)

これで大体の登場人物が揃いました。

グラエルさんは、理央の……友達？

割とこの人もひねくれてます。ていうかねじ切れてます。

リオウが人々に囲まれ、人酔いに陥っている頃　　ヴェリオスはヴェリオスで、鼻孔を絶え間なく攪る匂いに酔いそうになっていた。

「先ほどのご挨拶、とても素敵でしたわ。ヴェリオス殿下」

夢の中にいるような声で言ったのは、自国の伯爵令嬢だ。まだ年若い彼女はヴェリオスに憧れを抱いているのか、こうしてあう度に甘ったるくうっとりとした視線を寄越してくる。

「ええ、本当に。このようにご立派な王子殿下がいらっしゃるなら、ハイグレード国も安泰ですわね」

その伯爵令嬢の隣で彼女の言葉に頷き、妖艶な笑みをヴェリオスに向けたのは西の隣国、エンデルシアの公爵令嬢。

丁度適齢期なのだろう彼女は、扇で口元を隠しながらどこか挑発的な目でヴェリオスを見ていた。

「魔竜の脅威もなくなったことですし、そろそろ戴冠のお話も出ているのではなくて？」

そういったのは　誰だったのか。もはやよく分からない。

ヴェリオスの周囲を取り巻く令嬢方はその誰か分からない娘が言った言葉に、色めき立った。

それを適当に宥めながら、ヴェリオスは自分は一体どうしたのだろうと疑問を抱く。

舞踏会でも、夜会でもこういった華やかな場では、ヴェリオスが令

嬢方に囲まれるのが常だった。

華やかな容姿と立場。ヴェリオスは自分がとても女性受けがいいことを知っていたし、何もしくとも寄ってくる女性達と恋愛紛いのようなことをして楽しんでもいた。

こうして華々しく着飾った令嬢方に囲まれるのも嫌いではないはずだったのだが。

「ヴェリオス殿下？」

令嬢の一人が首を傾げ、ヴェリオスを窺う。そんな仕草ひとつに、苛立ちのような感情を覚える自分に気付く。

「どうかありませんでした？ お顔の色が優れないような……」

その言葉を皮切りに、令嬢達はヴェリオスを気遣う言葉を口にしはじめる。

心配するのなら黙っていてほしい。甲高い声が正直耳障りだった。匂いにしてもそうだ。一人一人の香水が、集まり混ざること余りいい香りとはいえないものになっていた。

ヴェリオスの顔色が悪いのには気付くのに、それが自分達のせいであることにどうして彼女達は思い至らないのか。

いや、おかしいのはヴェリオスの方なのだろうか？

ふと違う答えにたどり着く。彼女達はいつもと変わらない。今までヴェリオスもこんな風に令嬢方の行動が一々気に障ることもなかったはずだった。

なのに、今は今すぐにでもこの輪を抜け出したいと考えている。抜け出して、そして

(……そして?)

不意に頭に浮かんだのはこの祝勝会の主役だった。いや違う。さつきからずっと、彼女の姿が頭から離れなかった。

令嬢の声が耳を刺せば、彼女の高すぎず低すぎない声を思い出し、ぎらついた視線を感じれば、彼女の透き通った黒い瞳を思い出し、香水が入り混じった匂いに酔えば、彼女の香りを夢想し　さつきから、彼女達とリオウをずっと比較していた。

ヴェリオスは無意識のうちに周りに視線を巡らせる。相変わらずの社交性ならば、きつと広間のどこかで困っているはずだ。

広間に入る前を見た、彼女の姿を思い出す。白いドレスを身に纏った彼女は、百合の花をヴェリオスに思い起こさせた。

凜と立つ姿は犯しがたい神聖さを醸し出すのに、その癖下品でない程度に開いた胸元と、結い上げられた黒髪と白い頂の対比が男の目を吸い寄せる。

ある意味目の毒なあの格好を、無防備に他の男にも曝しているのかと想像すると、更に胸が騒いだ。

どうしてリオウのことを考えるだけでこんなにも心が荒れ狂うのか。疑問に思いながらも妙な使命感に突き動かされていたヴェリオスの目に、ある人だけが目に入る。

多分あの中心にリオウがいるのだろう。

直感的にそう感じたヴェリオスが周りにいるご令嬢方からどうやって逃げるか考えた時だった。

人だかりが綺麗に割れて、リオウが中から現れる。やっと姿が見えた彼女に近づく、一人の男。

「ねえ、あれ……」

いつのまにか広間は静まり返り、時折囁き合うようなさざめきが聞こえるのみになっていた。

ヴェリオスの周りにいたご令嬢も異変気付いたらしい、扇で口元を隠しながら囁き合う。

「ノマライト王よね……素敵」

そんな周りの目などまったく気にしてない風の男のことを、ヴェリオスも知っていた。

隣国ノマライトの王、グラエル・ノマライト。ヴェリオスよりも七つ上だが、既に賢王と名高い彼は、何故かりオウの手を自らの手で包み込んでいた。

勇者と一国の王という関係だけでは説明できない親密そうな雰囲気
が二人の間に漂っているのにも驚いたが

(……リオウ?)

彼女が、笑っている。それも下手くそな愛想笑いでなく、ごく自然に。

どうしてあそこにいるのが、自分ではないのだろう。

彼女の微笑みも、眼差しも、小さな手も　すべて、ヴェリオスのものだったはずなのに。

視線の先では、グラエルがリオウを庭へと連れ出していた。

20 (後書き)

ひとりじめじめする王子様。お前はヒロインかといづくらい、じめ
じめじめじめし続けます。

祝勝会もつつがなく終わり、ようやく肩の荷が下りたとその日は清々しい気分です。眠りについたリオウだったが

「リオウ様、面会の申し込みが殺到しておりますが、いかがなさいますか？」

どうやらまだ解放されないらしい。

「はあ…」

「お疲れ様にごさいます、リオウ様」

午前の予定を全て終え、服の襟元を緩めながら長椅子に倒れ込んだ理央に、女官の一人がぱたぱたと扇で風を送る。

香水を振ってあるのか、清涼感のある香りが風によって理央の鼻孔をくすぐった。

「ありがとうございます。ティルファさん」

金髪の女官の名を思い出し礼を述べると、彼女　ティルファは、ぽっと頬を染めた。

「によ、女官として当然のことをしているだけですわ」

ハイグレードでは一般的とされる金髪碧眼に、整った容貌。黙って立っていると高嶺の花のような印象があるのに、こうして話してい

ると彼女も年相応なのだ実感させられるし、和む。理央が微笑ましさに口元を緩めると、ティルファの顔が更に真っ赤になった。

「午後は……お茶会でしたっけ」

これからの予定を思い出し、ティルファに尋ねる。祝勝会の翌日から、理央には各国の要人達から面会の希望が殺到していた。その数は到底1日でこなせる数ではなく、ついさっきも隣国の外交大臣と面会を終えたばかりだが、理央の予定表は一週間先まで真っ黒になっていた。

「ええ、セルヴァー公爵夫人らと中庭でお茶会をすることになっております。

お召し替えはどうなさいますか？」

「できれば、このままで」

「かしこまりました」

衣服のことで特に何も言われなかったことに、内心ひどくほっとする。

現在理央が着ているのは、煌びやかなドレスではなく軍服を改造したようなものだ。勇者のイメージカラーなのか、白地に金の刺繍が入った上着とパンツは、少々装飾がうっとうしいものの、ドレスよりは余程機能性を重視しているため動き易い。それに、意外と周りの特に貴族の夫人や令嬢達の受けもよかった。

（男装しているようにでも見えるのかな）

理央は長椅子に寝転んだまま、今日は頂で一つに結わえて肩に流し

ていた髪を一房つまむ。
召喚された時は耳にかかるぐらいだった髪の長さは、今や胸に届くくらいまでのびていた。

だがこちらの世界の女性に比べると、理央の髪はまだ短い方なのだという。

理央に余り自覚はないが、その短めの髪もあいまってご婦人方の目には理央が男装しているように映っているのかもしれない。

理央もこちらの格好の方が楽なので、受け入れてくれるのはありがたいのだが　一応年頃の娘としては、心中複雑でもあった。

フィアンナの命で勇者リオウに付くことになった女官のうちの1人であるティルファの心は、充実に満ち満ちていた。

それは、仮といえど今の主であるリオウによってもたらされたものだ。

リオウに付くよう命じられた当初は、ティルファにもかなりの戸惑いがあった。相手は貴族の姫君でも、ましてやこの世界の人間でもない女性で、しかも勇者。

従来の仕事の仕方で通用するのだろうかという不安は、他の女官2人も抱いたようだった。

だが、心配は杞憂に終わった。

確かにリオウは貴族の姫君とは違ったが、素直で優しいひとだとティルファは思った。世界を救った英雄なのに女官長相手にたじたじになっている姿を最初に見たせいかもしれない。

何気なく「ありがとう」と言う声だとか、肌を見られることを恥づかしがるところとか、困ったように微笑む顔とか、ティルファ達限られた女官だけが見られるくつろいだ姿とか
ティルファはリオウが大好きになっていた。 ようするに、

そして、リオウに魅了されたのはティルファだけではなかった。

「リオウ様とお呼びしてもよろしい？」

「ええ、どうぞお好きなようにお呼びください」

リオウが微笑み了承すると、ご婦人方が色めき立つ。

中庭で白いクロスがかかったテーブルを囲むのは、リオウ以外いずれも結婚して5年以上は経つ夫人達なのに、リオウをうっとり眺める様はまるで恋する少女のようだった。

(まあ、気持ちは分かりますけれど)

リオウの後ろに控えたティルファも、密かに心の中で夫人達に同調した。

リオウはなんとというか……同性すら惹きつける艶のようなものを持っているとティルファは思う。中性的な雰囲気や仕草がそうさせるのだろうか。

その抗いがたい魅力に早くも虜になったらしい、夫人の1人がほう…と熱を孕んだ息を吐く。

「リオウ様のお召し物、素敵ね。まるで物語に出てくる騎士様のよう」

「そうですか？ 私も実は気に入っているのです。

私には女性が着るようなドレスは……その、似合わないでしょう？」

「まあ、そんなことありませんわ！ 先日の祝勝会でお召しになっていたドレスもとてもよくお似合いましたもの」

「ええ、今が騎士様なら……そう、聖女様のような神々しさでしたわ」

「ヴェリオス殿下と共に登場された時は、老若男女問わずリオウ様に見惚れていましたもの」

きやあきやあと沸き立つ夫人方の勢いに押され気味なりオウが、困ったように微笑む。そして、

「ありがとうございます」

ずきゅん。

夫人達の心が撃ち抜かれる音がティルファには聞こえたような気がした。

「でも、私は着慣れていないのもあってか、どうもドレスに着られてるような感じがして……やはり綺麗なドレスは皆さんのようなきれいな人に着てもらってこそ輝くものなのでしょうね」

ずきゅんずきゅん。

一度だけでなく、二度三度と正確に心を撃ち抜かれた女性達を見て、ティルファは思った。

（ああ、落ちましたね）

自分も一度通った道だ。彼女達の心情は手に取るように分かる。

きつと今頃、その胸の奥では忘れかけていたときめきや、暖かな母性が溢れそうになっていることだろう。こうなったらもう誰にも

勿論自分自身も止められない。次々と陥落していく貴婦人達を碧の瞳に映し、ティルファはどこか誇らしげな気持ちで微笑みを浮かべた。

ねえ、私達の勇者様は、素晴らしいでしょう？

22 (後書き)

自分で自分の首を締める勇者。

歴代の勇者は代々女たらしとかいう記録があつたりなかつたり……
理央さんは無自覚です。褒められたら謙遜して褒め返すのは日本人の礼儀というか癖。

「だから言ったたろう？ 大変だろうけどがんばって、って」

「……あれ、そういう意味だったんですか」

てっきり祝勝会の間だけのことを指していたのかと……

隣でのんびりと空を見上げるグラエルを横目に、理央はがくりとうなだれた。

面会ラッシュが3日続いた頃、理央が部屋でぐったりしているところにひよっこり現れたグラエルは、理央を庭に誘った。本当に、王にあるまじき気さくさである。

「なにか嫌なことでもされた？」

「いえ……そういうことはなかったんですけど、なんていうのか……疲れました」

贈られる美辞麗句や高価そうな物。贈る相手間違ってますか？と言いたくなるほど理央には勿体無いそれらは、下手に突き返すことも出来ず理央の心と部屋に積み上げられていく。

思わずグチグチとそのことを吐露すると、グラエルは不思議そうな顔をしていた。

「俺が贈り物をした時は、全部突き返したじゃないか」

「あれは、旅の途中でしたし」

「確か邪魔だからいらないうって言われたな」

「……もしかして根に持ってます？」

「いいや？」

にっこりと笑むグラエル。絶対嘘だ。

ノマライトに滞在していた頃、理央はグラエルに物を贈られたことがあった。ドレスや装飾品、珍しい食べ物。多岐に渡った贈り物はどれも高そうなものばかりで、理央はあわててそれらを突き返したのだった。

そう、意図の分からない贈り物なんて恐ろしいだけだ。それが高価なものであればあるほど、裏に潜む思惑が見え隠れしているような気がして。

もう、利用されることなんてないと思ったのに。

「リオウ……」

名前も知らない真つ赤な花に目を落とした理央の頭に、気遣うようなグラエルの声が降ってくる。

彼自身は周囲をすぐに煙に巻く癖に、どうして他人の心情はこつても容易く読んではしまうのか。ずるい、と思う。

「まあ、貰えるものは貰ってしまっただ構わないと思うよ」

「でも……」

「下心なんて知らぬふりをすればいい。」

口に出さない見返り要求など、叶えてやる必要はないよ」

「口に出された場合は、どうしたらいいんでしょうか？」

「何を言われたの」

問われて理央は、記憶を手繰り寄せる。

一番多かったのは「是非我が国にも来てください」だった。社交辞令のように言う人もいれば、かなり本気で誘ってくる人もいた。あとは

「……あ、グラエル陛下のことを訊かれました」

「俺？」

「ええ、仲がよろしいのね、とか……恋人なのか、とか」

グラエルのこと、というかグラエルと理央のこと、というか。

「ああ、祝勝会では目立っていたから」

「……なんだか、こうなること分かってたみたいですね」

「暇な人達っていうのは、邪推が何より好きだからね」

予想はしてたということか。嘆息する理央の頭を、グラエルがぐしやぐしやとかき混ぜる。

「わ、」

「そういうのが嫌なら、どんな男が相手でも2人つきりになったりしない方がいいよ。最悪相手にも誤解される」

「そんなこと言われても……」

乱れた頭を直しながら彼を見上げる。

今までそんなこと気にしたこともなかったが、よくよく考えてみればそれも当然だ。

グラエルが言ったのは、『女性として気にすべきこと』で。

ずっと勇者としての姿を求められ、応えてきた理央には縁がなくて当たり前だった。

「貴女はいまや世界を救った英雄だ。

そんな貴女を取り込むことで利用しようとする国は、少なくない。

例えば、結婚とかだね」

「……………」

他国の人達との面会でやたらと異性の話題が出たのは　つまりは
まあ、そういうことだったようだ。
なんというか……溜め息しかでてこない。

どこそこの王子が美しいだのうちの息子は年頃だの言われても理央
にはさっぱり興味が湧かなかつたし、グラエルやヴェリオスとの仲
をそういう風に邪推されるのにも正直辟易していた。

どうして皆、恋愛だの結婚だの当然のように口にするのか。
理央は、元いた世界に帰るのに。

「まあ、心配はいらないだろうけど、中には強硬手段をとるような
人もいるかもしれないし、充分気を付けるようにね」

グラエルの忠告に、理央はやはりため息しか返せなかった。

24 (前書き)

過去です。時系列がごっちゃりしてすみません。

「特別、仲が良い家族でもなかったんです」

頬に影を作る睫毛。華奢な肩。迷子になった子供のような、声。全てが少女を少女らしく見せていた。

初めて見た『勇者』のリオウではなく、ただの少女であるリオウの姿。

リオウがグラエルにとっての『特別』になった瞬間だった。

気付けば世界は腐敗していた。

長く魔竜の脅威にさらされていた国々の行く道は、腐敗するか、研磨されるか。その、2つだった。

ノマライト国は前者で、当時の国王　グラエルの父は、女と酒に溺れ享楽に耽る日々。放り出された政務はそんな父におもねる姦臣達に自分達の都合のいいように回され、そのしわ寄せは民衆へと向かう。

収入を遥かに上回る税をかけられた下々の者はある者は飢えて死に、ある者は国を捨て、ある者は逆らい　殺された。

その様はまるで、沈みかけた船のよう。

幼かったグラエルが自国の腐敗具合に幸いにも気付けたのは、正妃であった母と一部のまともな人間のおかげだろう。

母は強い人であったのだと思う。自分以外の女に夢中になり、こちらを見向きもしない夫は早々に見限り、我が子を守ることを考えた。

その結果、グラエルは13の時に隣国であり母の故郷でもあるハイグレードに留学させられ、その後、母は亡くなった。

死因は未だにはっきりと分かっていない。葬儀すらも行われることなく、すぐに別の女が王妃の座に付いたという。

それから5年、耐えた。

自国が坂を転がり落ちるように腐敗していく様を、母が我が子と愛しんだ民が国に喰われていく様を、隣国からただ黙って見つめて。

『国を救えるのは、あなただけ』

だから簡単に命を投げ出してはいけない。留学に出る前に母がグラエルに言った言葉が、まるで呪いのように感じた。

グラエルは何もできない苛立ちと焦燥をぶつけるように己を研磨した。そして5年後、漸くハイグレードの力を借りてグラエルは自国を取り戻したのだ。

リオウがノマライトを訪れたのは、それから更に7年が経った時だった。

はじめて見た時、母に似ていると思った。容姿がではない。生き様が、その姿勢が母によく似ていた。

夫を諦め、息子に望みをかけた母のように。何かを諦め、別の何か

を取り、そのために生きる者。切り捨てるということを知った者の姿。

この娘は、一体何を諦めたのかと、最初に抱いた興味はそれだった。

「陛下、いきなり現れるのは止めてください」
「何故」

「うっかり切り捨てそうになるんです」

窓から現れたグラエルに向かってそう言った彼女の手は、確かに剣にかかっていた。

はじめは興味本位で近付いただけだったが、グラエルはいつの間にかリオウを好ましく思っていた。

それは気の置けない友人に対するような「好き」だったかもしれないし、もっと甘い色を含んだそれだったかもしれない。

気付けばグラエルは日課のようにリオウのところへ通っていた。「異世界に興味がある」フリをして。

「さて、今日は何の話をしてくれる？」

リオウのために用意した部屋の椅子に陣取り、彼女を見上げると彼女は頭が痛そうな顔をしていた。

「分かりました。では今日は」

嫌そうな顔をして、結局グラエルの願いを聞いてくれる。そこもまた、グラエルが好ましく思うところだった。そっけなくて面倒くさがりの癖に頼られると無碍にはできない。そんな人間くささが、好きだった。

「どうして、リオウはそんなに頑張るんだ？」

そんな問いを投げたのは、どうしてだったか。城に滞在する間も鍛錬を怠らず、鍛錬場で剣を振るう姿を見たからだったと思う。

あるいは、その時にはもうグラエルは感じ取っていたのかもしれない。リオウがこの世界を決して好いてはいないことを。

グラエルが王になったのは、母のためだった。母の愛したノマライトを取り戻すためだった。だからグラエルはここまでやってこれたのだと思っている。

だが、リオウは？

異世界のことを話す時のリオウは、いつも愛おしさと切なさが入り混じった顔をしており、確かにそこに彼女の世界を感じた。

けれど、こちらの世界には？ 彼女が守るべきものや愛すべきもの、勇者になる理由が、彼女にはあるのだろうか。

不意に湧いた疑問をグラエルが投げ掛けると、リオウは虚をつかれたように目を瞬いたあと、ぽつりぽつりと語りはじめた。

「特別、仲が良い家族でもなかったんです」

彼女の周囲の　小さな、世界の話。

「両親はどちらも働いていて、たまに二人とも休みがとれても家のんびりしていることが多くて、その時だつて会話もそんなになくて……でも、仲が悪いわけでもないんですよ」

苦笑する彼女は、けれどどこか幸せそうで、眩しかった。

「友達もいました。なんとなく仲良くなった子達で、なんてことない話で何時間も話したりして……」

長い睫が、ふろりと震えて頬に影を作った。儚げな姿に、思わず華奢な肩を抱いてやりたくなつたけれど、できなかった。彼女を取り巻く空気は、グラエルの手を拒絶していたから。

「私が頑張るのは、元いた世界でまたそんな日常を送るためです」

黒目に強い光を宿して、まっすぐに前を見るリオウに、グラエルは魅入られた。

そして、理解した。

彼女が諦めたのは、世界であり そこに生きる、自分達であるのだと。

「私は、帰りたいんです」

そしてグラエルは、想いに蓋をした。
暖かな気持ちは、そのままに。

25 (前書き)

説明のつていうか説明。

現在の国王ルイゼアス・リア・ハイグレードには4人の子がいる。その内の三人は姫で、既にそれぞれ他国や臣下の元に嫁いでいる。そして最後に産まれたのが待望の王子、ヴェリオスだった。

産まれてくる子に姫が続き、長姫を女王として即位させるか、それとも婿をとらせてその者に などなどと臣下達が頭を悩ませていたところへヴェリオスの誕生は、どれほど喜ばしかったか。待ち望んでいた男子、その上国王にとっては年をとってからの子だ。大事に、それはもう大事に育てた。勿論ゆくゆくは父にも負けない良き王になってほしいと、時には厳しくもしていた。

なのに、どうしてあんな風になってしまったのだろう。

宰相のユディル・フォドラは痛む胃をさすった。

(いや、悪い方ではないのだ。王子としての責務もきちんとなし
ておられるし、度胸もある。ただ)

ただ、どうも調子に乗りやすいところがあるだけで。

嗚呼、擁護しようとしても何故かその一言で全部霧と化してしまう。
なまじ割となんでもこなしてしまう上にあの容姿だから、余計に質
が悪い。今まで特に大きな失敗をしていないのも、あの性格に拍車
をかけているのだろう。

そんな殿下が犯したはじめての失敗が今、1人の少女を苦しめている。その事実がユデイルの胃をきりきりと締め上げた。

リオウ・ハヤサカ。異世界から喚びだされた彼女は　きっと、気付いてしまっているのだろう。

自分が利用されたということ。

これは勘だ。本人に訊いたわけでも、確証を得たわけでもない。だが　城を出て行く前のリオウは、既にもう周りを『拒絶』していた。

どういう経緯を辿ったかは知らないが、恐らくその時にはもう、彼女は知っていたはずだとユデイルは考える。そして、ぞつとする。

当時の彼女はどんな気持ちで魔竜を倒す旅に出たのだろう。そして今、どんな気持ちで此処にいるのか。

王子だけが、悪いわけではないのだ。あの悪しき慣習を今まで踏襲してきた神殿も、それを黙認してきた国も　宰相という位置にながら何も変えられなかった自分にも、責はある。

責めてくれたのなら、まだ楽なのに　そんなことを考える自分に嫌気が差す。

リオウは、自分の状況を理解していたようなのに何も言わなかった。ただ、黙々と勇者としての責務を今もこなしてくれている。以前よりは分かり難くなつてはいたが、『拒絶』の空気はそのままに。それがユデイルにとって、何よりも恐ろしかった。

怒っているのではない。けれど、許してくれたわけでもない。

拒絶、無関心　リオウの目に宿るのは、ただそれだけで。謁見にて彼女を再び目にしたユディルは、彼女と自分達との間にある分厚い壁の存在を知った。

壁を作ったのは彼女だが、その原因が自分達にあることも。

（　　もしも、　　）

ユディルは考える。

もしも、王子にこのことをユディルが洗いざらい打ち明けたら、彼は己の罪を自覚するのだろうか。

もしも、自分達が心を尽くし謝罪して、彼女がそれを受け入れてくれたのなら　その先にある未来は、どんなに優しいだろう。

きつとそんなことは有り得ないと、理解している。

リオウは伝説の中の『勇者』ではなく、自分達と同じ人間だ。

自分達が彼女と同じ立場に立たされたらと考えれば、この先に描かれる未来など容易に想像できた。

（殿下……）

彼女はもう、自分達を許すことはないのだろう。

決して易しくない未来で、彼はようやく自分の罪を知るのだ。そして、ようやく自分の中にある感情に気付くのかもしれない。

（初恋は叶わないというが……）

まさしく、その通りだった。

誰も彼も、全てが遅すぎたのだ。

25 (後書き)

宰相は胃痛持ち。

彼からしてみれば王子は息子みたいなもんなので、本当は理央と結ばれてくれればいいと思ってるんですが理央に対する罪悪感などもあるので単純に王子を応援できないんでしょうね。

近頃、城内も城下も、世界中がリオウ一色に染まっていた。

世界を救った勇者なのだからそれぐらいは当然とは思っただが、他人の口からリオウの名が出る度、ヴェリオスは靄とした気持ちを抱えていた。

おかしい。

1日の仕事を終え、自室でくつろいでいたヴェリオスは、到底くつろいでいるとは言えない表情で椅子に座り、テーブルの表面を苛立ち紛れに指の爪で弾いた。

日増しにこの形容しがたい感情は、胸の内で領土を広げていく。甘くて苦くて、病気かと思うほどに苦しい。それは決して清々しいものではなく、もっとどろどろとした、感情。

その中心にあるのは、多分

「……………?」

ふと、ヴェリオスの伏せられていた瞼が持ち上がる。

扉の外が騒がしい。もう夜も遅く、殆どの者が眠りについてるだろうに　何かあったのかと腰を浮かしかけたヴェリオスだったが、それよりも先に回廊と自室とを繋ぐ扉が勢いよく開かれた。

「やあヴェリオス。邪魔するよ」

まるでここが自分の私室であるかのように堂々とヴェリオスの部屋に入って来たのは、隣国ノマライトの国王、グラエルだった。

「グラエル…陛下」

「公式な場ではないのだからグラエルでいいよ。なんなら昔のように兄上でも」

「それは遠慮させていただきます」

即答すると、グラエルはつまらなさそうな顔でヴェリオスの向かいに腰を下ろした。

あまりにも堂々とした振る舞いに文句を言う気にもならず、ヴェリオスは入り口でオロオロとする見張りの衛兵に、気にするなと手を振った。

グラエルはヴェリオスが小さい頃に留学という名目でハイグレードに4年ほど滞在しており、ヴェリオスにとっては兄のような存在だ。今でもその関係性が変わらず、こうして突然グラエルが訪問してくることも珍しくはなかった。

「何か御用ですか？」

「いや、こうしてこちらに来るのも久々だから、色々と話したくてね」

「はあ」

ヴェリオスはグラエルをなんとはなしに見つめた。強さをそのまま表したような立派な体躯と、座っているだけでも他を圧倒する威風

王という存在を体現したような男。それが、グラエル・ノマライトで、自分が持っていないものを持っている彼を、ヴェリオスは誇ら

しくも妬ましくも思っていた。
今は、どちらかと言えば妬ましさの方が勝っている。

リオウとは、どういう関係なのですか？

脈絡もなにも関係なくそう聞けたら、どれほど楽だろうか。
あの日からずっとヴェリオスの脳裏には、祝勝会で親密そうな雰囲気
を醸し出していたりリオウとグラエルの姿がちらついていた。
そして本人が目の前いる今、その映像はより鮮明になってヴェリオ
スの胸を締め付ける。

軍人と並んでもまったく見劣りしない風貌を持つグラエルの隣
に立つリオウは、いつもよりもその線の細さや娘らしい淑やかさが
強調され、またグラエルもリオウの隣にすることでか空気に柔らか
さが増し、いつもより包容力に満ち満ちているようにヴェリオスに
は見えた。

互いが互いを引きたて合う2人は、似合いの恋人同士のように。
ヴェリオス以外の者の目にも同じ様にうつつたのだらう。今巷では
勇者とノマライト王の仲が噂されているようだ。
その事実が妙に腹立たしくて、ヴェリオスは無意識のうちに嫉妬と
戸惑いの入り混じった視線をグラエルに向けていた。

26 (後書き)

突然ですがヴェリオスは17〜19才。グラエルは25才。理央は16か17才くらいです。

グラエル以外の年齢は殆どアバウト。あんまり深く考えてはいけません。

(おや、まあ)

一丁前に嫉妬の視線を向けてくるヴェリオスに、グラエルは端から見て分らないくらい僅かに目を丸くした。弟のように可愛がっていた親戚が、少し見ない間に男になっていたことに驚きを覚える。それでもグラエルから見ればまだ半人前であることに変わりはないが。

さて、これを良い変化と捉えるべきか。

ヴェリオスの恐らく見当違いの嫉妬を受け流しながら考える。兄のような立場をとってきたグラエルとしては、数年前より遙かにマシな顔つきになった弟のような彼の成長を喜ぶべきなのだろうが……男としての部分が、『面白くない』と誤ってしまふ。それは多分、ヴェリオスの変化にリオウが少なからず関わっているのが要因だろう。

リオウ。そう、リオウだ。

グラエルが今夜ヴェリオスの私室を訪れたのは、兄弟のように育ったヴェリオスと、久々に仲良く談話するためではない。グラエルは 八つ当たりをしに来たのだ。

「なあ、ヴェリオス」

「はい」

「リオウを弄んだというのは本当かい？」

「っ」

唐突すぎる切り出しに、青空のような色の瞳が丸くなり、揺れる。その様子をグラエルは冷静に観察していた。

どうやら罪悪感はそれなりにあるらしい。結構なことだ。

「どこで、そのようなことを……」

「ひとりの女官が面白おかしく吹聴していたのを偶然聞いたんだ」
半分は嘘だった。

グラエルはずっと、気になっていたのだ。リオウは理由もなく他者を切り捨てられるほど冷たくはない。母もそうだったように、何かしらの理由があったはずだ。今回グラエルがハイグレードに来たのは、その理由を知りたいがためでもあった。

そして、それは質の悪そうな女官に一言一言甘い言葉をかけるだけで知ることができた。

国がリオウをいよいよに利用するため、ヴェリオスを使って彼女を騙していたこと。騙されていることも知らずにまんまと利用されたとリオウを嘲笑った女官は、グラエルに向かってこう言った。

『あなたもそうなんでしょう？』

思わずその女官を殴りそうになったが、殴るべきはこの女ではないとその場は押しとどめた。

その殴られるべき男　ヴェリオスは、忙しなく視線をさまよわせたあと、観念したように口を開いた。

「……確かに俺は、彼女を弄んだと言われても仕方ないと思います、でも」

「『仕事』だったから、か」
「……はい」

それは本当に 結構なことだ。

自分の眼光で、ヴェリオスがたじろぐのを感じたが気にしない。今グラエルが振りかざそうとしているのは正義感からのものではなく、理不尽なものだ。

グラエルは考える。

理央が何故自分達を切り捨てたのか、理由は簡単だ。

一度、酷い仕打ちを受けたから。

もう利用されないように、自分から周りを切り捨てた。それは当然の帰結だろう。

『私は、帰りたいんです』

はつきりとそう言った彼女の声は、今もグラエルの心の奥深くまで突き刺さっていた。

この想いが報われぬことを知った。それでもそばにいたいから、想いに蓋をした。

リオウは、グラエルにとって何ものにも代え難いひとだ。

人として、友として そして、女性としても。

想いに蓋をしても、それは変わらない。だって、捨てたわけではないのだから。

だから、グラエルは思ってしまう。もし、国がリオウを利用しようとしなければ、違う未来があったのではないかと。

「ヴェリオス。俺はね、もし望みがあるようならリオウに求婚しよ

うと思っていた」

「は？」

一国の王子としては余りにお粗末な反応だ。驚きを露わにするヴェリオスを前に、グラエルは笑みを深めた。笑うのが下手、と彼女に言われたことがある。でもそれはリオウに對してだけだということを彼女は知らないのだろう。

（貴女だけ、なのにね）

彼女を前にすると、自分を取り繕うこともできなくなる。そんな妙に苛立たしくて、幸せな感情をグラエルに教えてくれたのはリオウだ。

「もし彼女が受け入れてくれるのならば、王妃にと思っていた」

それは、なんて甘美な想像なのだろう。

彼女が隣にいて、自分と共に歩んでくれる。ただそれだけで、幸せを感じられる。グラエルがもつと傲慢であれたなら、或いはそれを実行していたかもしれない。

「でも、できなかった」

だって、どれだけ想像したところで、グラエルの隣に立つリオウは笑っていなかったから。

所詮、自分も臆病なただの人間なのだと思い知らされる。

リオウに、母のような顔をさせたくなかった。そして自分にも、そうさせない自信が持てなかった。

言葉も出ない様子のヴェリオスに笑いかける。

こうしていると、鏡を見ているようで酷く苛々した。

「なあ、ヴェリオス」

そこにあるのは、ひとりの愚かな男の、顔。

「リオウにはリオウの世界が、家族があることを、どうしてみんな気付けないんだろうな？」

代わりがきくことのない世界は、誰の中にもあるはずなのに。

27 (後書き)

王子の方もグラエルに劣等感を抱えています。グラエルも王子に対してコンプレックスみたいなものはあると思います。

っていうか王子がわりと他人をイラッとさせるタイプ。

大事に大事に育てられた上、それが普通だと思っている人間って、それなりに辛酸を舐めてきた人にとっては見ててイラっとなるんじゃないかと。

別に嫌いあつてるわけじゃないのです。

どうして自分だったのだろうか、理央はずっと考えてきた。

召喚される勇者の条件は『こちらの神が干渉できる人物』とされている。神は誰にでも加護を与えられる訳ではないらしい。

その干渉できる人物にも、与えられる加護の量にそれぞれ制限があり、理央はそれなりに多く加護を受け入れられたからこそ、ここにいる。

理央はいわば、選ばれた人間だということだ。全く嬉しくないが。

理央が考えるのは、他にも当てはまる人物がいるはずなのに、どうして自分だったのかという話だ。

たとえば、理央以外に喜んで勇者をやってくれるような人はいなかったのかとか、そうでなくとも男性の方がよかったのでは、とか。色々、色々 考えてきた。

考えても仕方のないこと。そんなことは分かっている。

(こんなのばかりだ)

たとえば、もしも。

それで現状が変わるわけでもない、知ったはずなのに。

「理央……」

理央は目を開けた。

真っ暗な空間に浮かぶ、光の球。まだあれから1ヶ月もたっていない

はずなのに、妙に懐かしく感じた。

「お久しぶりです」

「還る方法は、見つかった？」

開口一番に聞くべきは、やはりそれだろう。自称神は、ゆっくりと明滅を繰り返しながら理央の前をふよふよと浮いている。

「まだ、確証はありませんが…恐らく」

「可能性はあるのね？」

「はい」

「世界に影響は？」

「ありません。ただ、今すぐという訳にもいきません」

「時間がかかるの？」

「ええ」

「どれくらい」

「5年…くらいでしょうか。ですが還った時には、向こうの世界と貴女の時間を貴女が召喚された時まで時間を巻き戻させます」

5年　理央はその言葉を噛み締めた。

それは多分目安としての数字。本当はもっとかかるかもしれない。でも、その時間を耐え抜けばこれまでの時間を、今度こそ夢にすることが出来る。

ならば、理央が出すべき答えは一つだ。

「分かった。どうすればいい？」

ぴた、と動きが止まる。

「……迷わないのですね」

「私は、帰れるのならなんでもいいの」

願いはずっと、一つだけだった。

理央の家族は特に仲のいい家族なわけでもない。友人だつて、理央がいなくなっても大して支障はないだろう。

もしかしたら、こちらの世界の人の方がずっと理央を求めてる人は多いのかもしれない。でもそれがなんだというのか。

郷愁に、理由などないのだ。

だからこそ、そう簡単に消すことはできない。こちらに喚ばれてから理央はそのことを知った。

「帰った時には、向こうの時間は殆どそのままなんでしょう？
だったら、問題ない」

ああ、でも　と理央はそこで一旦区切ってから、にっこりと笑む。

「少々待たしておいて、いざ帰るって時にまた『できません』なんて言いやがったら　今度は私、何するか分からないから」

「は、はい、それは重々承知してます」

ならいいのだけれど、と理央は殺気をしまい、口を開く。

「それで、私はどうすればいいの」

28 (後書き)

男2人が生産性の無い会話をしている間に、理央は帰ることを決めました。

こっから理央視点中心で進んでいきます。

「すみません、突然お呼び立てするような真似をしてしまって……」

一国の主を前に恐縮する理央に、その一国の主は孫を見るような目で理央を見、朗らかな笑い声を上げた。

「そう恐縮せんでも、とって食いはしない」

「はあ……」

謁見の間ではなく応接間のようなつくりの部屋で相對したハイグレード王は、目線がほぼ同じところにあるせいか、いつもとはまた違うように見えた。

妙に威厳のある好々爺というか、なんとというか。なんだか変に緊張する。

しかも長椅子に腰掛けた王の後ろには、宰相が人のよさそうな笑みを浮かべて王と理央とを微笑ましげに見守っているものだから、妙に気恥ずかしい。

「そなたが魔竜を倒してくれてから、急に具合が良くなってな。医者にも驚かれたよ」

そう言った王の口調は、確かに謁見の時よりもはきはきとして希望に満ちている。

「だからこれくらい、どうとということもない」

「……ありがとうございます」

何を言うべきか迷って礼を述べると、「礼を言うのは私の方だろう」

とまた笑われてしまった。

本当に、元気そうだ。

理央は膝の上に置いた手を握りしめた。

「あの、お話があるんです」

「おお、そうだったな。なんの話だ？」

握りこんだ爪が、手のひらを突き刺す。

「城を、出ようと思います」

間。

何秒か、何分か沈黙が部屋に落ちて、理央の神経をすり減らした。

「それは、短期的に、という意味ではなさそうだな」

やがて返ってきた声は、ついさっきまでとはまるで違う、疲れきったような継るような声だった。

理央は小さく顎を引いた。

「城を出て、どこへ？」

「まだ決めていません。ですが……どこか、人のいないところへと考えています」

「……何故、そんなことをするのか聞いても？」

「私が、私のいるべきところへと帰るためです」

そのためには、ここにずっと滞在するわけにはいかないのだ。理央は神の言葉を思い出す。

『貴女をすぐに元の世界に還すことができないのは、貴女がわたしの子らに慕われすぎているからです。だが、嫌われれば良いという訳でもない。強すぎる憎しみもまた、貴女を引き止める枷となるでしょうから。』

好かれすぎるのでも、嫌われすぎるのでもいけない。

一番いいのは、忘れられることです』

だから、理央が今いる状況は還るためにはとても良くないと言われた。

要するに理央は民衆の目からフェードアウトしなければならぬ。突然消えるのではなく、徐々にその姿を消していけば理央を勇者として慕う人々からの枷はなくなるという話だった。

「いるべき所、か。……そうか、あなたにとって、ここはそうではなかったか」

「……はい」

眉間の皺を深くして言った王に、理央は逡巡しながらもしつかりと頷いた。

同情などしてはいけない。それは、これから去る人間がしていいことではない。

王はしばらくの間、瞑目していた。

理央はじつと、彼の言葉を待った。

「私は、幼い頃よりずっと、勇者の伝説を聞かされてきた。」

その強き力と優しき心は、私の憧れだった。魔竜が現れてからは勇者の降臨を待ち望み、そしてあなたは、伝説その通りの力と優しさを持って、私達の世界を救ってくれた」

王はそこで一旦言葉を区切っていた。そして、細く息をつく。

「だが……本当は、気付いてもいたのだ。召喚された勇者が、伝説の中の存在ではない、1人の人間であることも。リオウ、貴女にはどれだけ感謝と謝罪をしても、足りない。

すまなかつた」

一国の王に頭を下げられて、理央は一瞬何を言っているのかすら理解できないほど戸惑った。

王は頭を下げたまま、続ける。その姿はまるで懺悔をするようでもあった。

実際、そうだったのかも知れない。

「国のため、と言いながら貴女にはとんでもない重荷を背負わせてしまった上……貴女はもう気付いているだろうが、息子を使って貴女を騙そうとさえした。

全ての責は、私にある。この老いぼれの身で罪が全て購えるとは思ってはいるが、どうか許してほしい」

「そん、な」

そのあとに続く言葉を、理央は飲み込んだ。巻き起こったのは、あまりにも醜い感情の渦。

例えばこれが、理央が騙されたと知った直後だったならば、感情のままに怒り、詰り、けれど最終的には許せたのかもしれない。

しかし今更そんなことを言われても、理央には怒ることすら出来なかった。

「陛下、頭をあげてください」

「しかし、」

「もう、私の中ではそのことは、許すとか許さないの問題じゃないんです」

そう、理央の中の感情はそんな段階にはないのだ。

理央は唇を噛んだ。ここで、あの日覚えた怒りややるせなさを吐き出したとして、きつと周りは愚か自分さえも傷付けるだけだ。

「リオウ」

「っもうそのことには、触れられたくもないんです！」

ようやく塞がりかけていた傷口を抉って、一体何になるのか。いや、彼らは謝罪したことに満足を得るのかもしれない。だが 理央は？

許すこともできない自分は、どうすればいいのだろう。

大きく空気を震わした理央の声は、けれどすぐに溶けて消える。

まるで自分のようだと、思う。

ほんの一時空気を揺らしても、すぐにその空気に飲み込まれてしまふ。

(駄目、だ)

許してはいけないのに、許してしまいそうになる自分が、一番許せなかった。

『そして、もう一つ。貴女が特に関わってきた人とは、城を出る前に一度話をしてください』

『話って……なんの？』

『元の世界へ帰ることを。とにかく、はじめをつけていただきたいです』

そう、はじめを着けに来たのだ、理央は。

「リオウ……」

王の途方に暮れたような声を聞いて、理央は幾分か冷静さを取り戻す。

「私は、故郷に帰りたいがために、今日までやってきました。自分の為です。この世界の為でも皆さんの為でもありません」

だから、と続ける。

好かれようだなんて思っではいけない。

もう、枷は外さなければ。

「感謝も、謝罪も要りません。

私が望むのは、自由です」

理央は真っ直ぐ前を向いてそう言いきった。

「……そうか」

答えた王は、がくりと落ちた肩のせいがこの数分ですっかり老け込んで見えた。

その光景に、僅かに胸が痛んだ。けれど気付かないフリをして、膝に視線を落とした。

まるであの頃に戻ったようだ。

いきなり召喚されて、勇者なんて肩書きを押しつけられて、1人で心細くて俯いてばかりいた頃の理央に。

はじめて対峙した時の王は今にもぽっくり逝ってしまっただけじゃないかと思うほど弱々しく、理央は自分の状況も忘れてすっかり心配してしまったのを覚えている。だからだろうか、理央はそこまで王に対しては嫌悪感を抱いてはいない。

(だから、駄目なんだ)

もっと悪い人とか、元氣そうな人が相手であれば理央だってまだここまで良心は痛まなかったはずだ。

けれど王は、いい人だった。

この数十分の間の王の言葉が、態度が理央にそれを教える。

もっと息子のように悪びれないひとであれば　と理央が思っていたところに、王の溜め息が重なる。

「……そうだな。それが貴女に対する一番の礼であり、償いなのだから」

「では」

「ああ、好きにするといい」

しわくちやの顔を更にしわくちやにして述べた王に、理央は自然と頭を下げていた。

「ありがとうございます」

歡喜と、ほんの少しの寂しさを噛み締める理央の頭に、「ただ」と王の声がかかる。

「ただ、ひとつだけ貴女に頼みたいことがある」
「頼み、ですか」

訝り顔を上げた理央に、「個人的なことだ」と前置いてから王は口を開いた。

「息子のことだ。あれは恥ずかしいことに、中身はまだまだ子供でな。

貴女が帰ると聞いて、みつともなく駄々をこねるかもしれない。

その時は一度だけでいい。話を聞いてやってはくれんか」
「……………」

父親の顔でなかなか厄介な頼み事をした王に、理央は正直言葉に詰まった。

ヴェリオスは理央のトラウマそのものだ。彼の話を知ること
は いや、彼が駄々をこねると思えないが、もしあったとして
そのトラウマと対峙するということだ。

（でも、彼ともけじめをつけないといけない……………の、かな）

殿下が理央を失いたくないと願っているとは理央には到底思えないが……………まあ、関わりならばあったし。一度話はしておいた方がいいかもしれない。

理央は迷ったが、結局頷いた。

「わかりました。一度、だけなら」

不承不承といった感じが顔にでていたのだろう。王は「ありがとう」とほろ苦く笑った。

扉の閉まる音のあと、室内に重く長い溜め息が響いた。

「陛下……」

宰相は、うなだれた王に対し言葉を見つけられなかった。

王と同じように、自分もどうしたらいいのかわからなくなるほどの衝撃を受けていたからだ。

リオウが城を去る。それは、考えてみれば当然の帰結だったのかもしれない。

自分達が今までやってきたことを考えれば、むしろ今まで城に滞在してしてくれたことの方がおかしかったのだと思う。

自分達はずっと、彼女の優しさに甘えていた。理解していたはずなのに、実際に感じたりリオウの怒りや戸惑いが、胸を抉る。

「後悔することも、許されぬ……か」

王の呟いた言葉が、抉られた胸に染み入る。感謝も、謝罪も不

要と言いつつたりリオウの顔は、はつきりと宰相らを拒絶していた。

もう関わりたくないのだと、あの澄んだ瞳が物語っていた。

我々は一体なんなのだろうと宰相はずっと疑問に思っていた。

リオウはこちらに来るまで剣を握ったこともなかったという。

そんな彼女に剣を握らせて、魔物と戦わせて、ただひたすらに救いを待つ我々は、一体なんなのだろうと。

民が窮地に陥る度ハイグレードは勇者を召喚し、そして世界が救われる。それがこの世界の『普通』だった。

けれどその一方で、戦うことを厭い、「帰りたい」と嘆いた勇者がいたこともユディルは知っていた。彼らは今では誰にも語られることなく、限られたもののみが見られる歴代の勇者の記録でのみ、記述が遺っている。

『失敗』として扱われた彼らの末路は、往々にしてひどいものだった。

ある者は自ら命を絶ち、ある者は「勇者にふさわしくない」と始末され、ある者は、その力を人間に向かって振り回した。

(救いを待つだけでは、駄目だ)

うなだれたままの王の前に、ユディルは決意する。

悪しき慣習を無くしたところで、きつと自分達の子孫はまた同じ過ちを繰り返すだろう。

そうではなく、自分達の世界を、自分達で救えるようにならなければ 勇者という役目を、なんの関係もない異世界の人間に負わせることのない世界にしなければならない。

きつとそれが、彼女に 彼女達に、我々ができる唯一の償いだろうから。

31 (後書き)

宰相を書くのが本当に難しい……

32 (前書き)

毎度短くてすみません。本日二回目の更新です。

「あ、グラエル陛下」

庭園でぼんやりしていたグラエルに声がかかる。それは愛しいひとのもので、グラエルは些か驚きながらも振り返った。見ればグラエルに向かって、彼女が駆けよってくる場所だった。

「ようやく見つかった……お付きのひとを探しましたよ」

「探してくれてたの？」

「あ、はい。お話があって」

すぐそばにまで来たリオウがそう言って笑むので、グラエルは心が綻ぶを感じる。

そんなそわそわとした空気が漏れ出ていたのだろう、リオウがグラエルを見上げて不思議そうに首を傾げた。

「どうかしました？」

「……どうして？」

「なんだか嬉しそうだったので」

グラエルは口元をゆるめた。

貴女が自分を探してくれた。それがたまらなく嬉しいなんて言っても、リオウは信じてはくれないだろう。

「なんでもないよ。それで、話って？」

だから、グラエルはゆるめた口元はそのままに、リオウを促した。

「そう。帰るの」

その時自分が何を思ったのか、それは自身にもよく分からなかった。ただ、唇から零れたのは、安堵したような、置いて行かれた子供のような　そんな声だった。

リオウが、帰れることになったと言う。

「今すぐ、という訳ではないのですが……城は近い内に出ようと思ってます」

自分の気持ちを掴みかねているグラエルとは対象的に、彼女はとも自然に微笑んでいた。ようやく故郷に帰れることになって、気負うものがなくなったのだらう。

ぐっと柔らかかみを増した雰囲気、こちらまで幸福になる。

これでよかったのだ。元よりリオウの幸せは、こちらには無かったのだから。

「そうか。…もう、会えなくなるのか」

だからといって、寂しさがなくなるわけでもないけれど。

自分も自由な身ではない。そろそろ自国に帰らねばならないだろうし、そうなればたとえ同じ世界にいたとしても、リオウとは会うことができなくなる。

会うのはこれで、最後かもしれない。

その思いが、グラエルの背中を押した。

「リオウ」

右手を上着の内ポケットへと潜らせる。

ずっと渡したいと思っていた。けれど渡せずじまいだった。彼女を困らせるだけだと、思ってた。

でも、最後に、一つだけ叶うのであれば

「我がママを、言ってもいいかな」

懐から取り出したそれは、きらりと日の光を反射して煌めいた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7237w/>

エピローグ

2011年10月12日12時14分発行